道教

第拾卷

第六號

本社總發行所上海三馬路三十號時報社發行（每月一冊連郵費洋四角）

求道第拾卷第六號目次

求道

◉眞の信仰、假の信仰　講義　近角常觀

◉『教行信證』信卷三信釋　第九席　信樂釋（現生正定聚）　告白　大原達道

◉不可思議善巧方便　出村鉦逸

◉病床大威神力を信知し奉りて　林和輔

◉恩德廣大不思議なり　澁谷淳藏

◉十年の聞法さては皆な虚戯に屬せし乎　堤みゆき

◉私一人のための御苦勞　時報

◉第三回夏季求道會

講話

毎日曜午前九時　求道學舍（本郷區森川町一番地）

毎土曜午後二時　第二求道會（九段坂佛教倶樂部）

毎月二日午後七時　第三求道會（日本橋蠣殼町說教所）

（九月第二土曜以後凡テ開會）

求道　第十卷　第六號

眞の信仰、假の信仰、

信仰問題に於て、最も肝要なることは眞實の信仰と權假の信抑との區別である、信仰につきて可否を論ずるは一見頗る穩かならざるが如きも、眞實の信仰の存在を認る以上は是非之を宣明せねはならぬことである、抑々信仰なるものは各人各別のものにして、個々別々のものとすれば是非善惡は言ふべき譯はない、されど信仰に永久不變の動きなき眞實の存在することを信ずる已上は、其區別があらなければならぬ、歎異鈔の終の有名なる善惡のふたつ總してもて存知せざるなりの敎訓は世の善惡是非はさらに分からず、唯そらごとたはごとの世の中に、念佛ばかりは眞實であるが、實に世上として我も人もそらごとばかりを言ふて居る世の中に、唯一つのいたはしきとは、聖人の眞實の信仰を申しまぎらかすとであるとの意味である、畢竟するに聖敎に眞實權假の區別があるゆへに、權をすてゝ實をとり、假をさしおきて眞を用ゐるが聖人の本意であるとの仰である、親鸞聖人一代の精神は畢竟淨土眞實の信仰を顯揚することにあるのである、かく云へばとて今時世上によくある異安心呼はりをして、落來の敎權主義を以て律法的に新らしき青年の信仰の勃興に對して、抑壓を加へんとするが如きは斷じて採らぬ處である、何んとなれば世の敎權に固執するばかりて眞の信仰のなきものが、徒に彼我の見に囚はれて、ともかくも眞面目に人生問題、信仰問題に傾心するのを妨げんとするからである、何んとなれば眞實に人生問題、信仰問題に心を注ぐならば、たとひ眞實に達せざるも必ず自己の不十分なるとを自覺する時が來るからである、しかし又青年の敎家に注意すべきとは、果して自己が眞實の信仰に徹せるか否やを反省することが肝要である、即眞實の信仰に徹せりや、假の信仰に止らざるやの一點である、若し求めて止まざるものならば、必ず自己の不十分を自覺するの期あるべきも、さもなくばいつまでも未徹底の狀態を以て停滯せぬとも限らず、此點に於ては、たしかに眞の信仰、假の信仰の區別を注意せねばならぬ、假の信仰といふて別に存在するのではない、たとひ眞の信仰をきゝても十分徹底せざる限りは假に陷るのである、敎權的に法義を喜ぶ人も、青年敎家も、世の人

生問題、信仰問題に傾心する人も、此點につきては眞面目なる自覺があらなければならぬ、我が同朋讀者諸君に於ても其點に於て十分徹して貰はねばならぬ、世間體に考へたらは、其樣に狹隘に言はずともよさそうなものと思ふ人があるであろうが、若し此點を疎かにするなれば宗敎として傳道の根本がたゝぬ樣になる。

しかれば眞實の信仰と權假の信仰との區別の要點は何れであるか、諸種の言ひ方があるのである、されど先づ其適切なる區別を云へば、廻向不廻向といふ問題の如きが是である、眞實の信仰は如來廻向である、從て行者自力の廻向でない、權假の信仰は行者自力の廻向である、かく云へば敢て珍らしき言ひ方ではない樣なれど、抑々廻向といふにつきて其方向を考へねばならぬ、全體佛敎に於て普通廻向といふ言語の使ひ方に、如來廻向といふ樣なる言辭はない、廻向と云へば行者が修するところの功德を廻らして、佛乃至一切衆生の方へ向けるといふことである、しかるに茲に方向を一變して如來廻向といふ破格なる、しかも常軌を逸したる言辭を用ゐたまひ、且つ謹案淨土眞宗有二種廻向と、先づ眞宗全體を如來廻向と顯はしたまへるのである、即ち如來の方より五劫永劫の御苦勞を廻らして我等に向けたまふことである、しかるに自力廻向と云へばとて決して必しも之を知らぬといふ筈はなけれども、畢竟ずるに之を持ち變へて、方角をかへて、衆生より佛に向ふからである、自力廻向と云へばとて、念佛を以て自分が功德として如來に向ふといふばかりではない、たとひ佛にせよ信心にせよ、佛かねてしろしめとすと我心で思ふて作りたり、かく信ぜねばならぬと自分の主觀で作りたりすることは、皆我方より作られたる信仰である、假想されたる信仰である、我思想から思ふて居る信仰である、權假といひ、定散自力といふは是である、眞の如來廻向にあらざるかぎりは、我等が冥想にて假定されたるものか、理想にて作り上げたものか、何れかになるのである、今日青年の多くは冥想觀念に陷るか、理想實行に在るか、二者其一に居るといふことは古來人間に定機あり、散機ありといふことである、故に助けて下さると思ふのも、光明の中に在りと思ふのも、喜ばしいと思ふのも、實に權假に陷り安い、宇宙觀に陷り、運命觀に陷り、自分の心內で形作られたるものは皆假の信仰である、たとひ言の上では眞實の信仰と同樣と雖、かく〳〵我心で思ふて居るのなれば、忽ち權假に陷るのである、ゆめ〳〵油斷してはならぬ、

若し本誌を讀みて、かく〳〵と心に思ひ定めて居るならば、忽ち假に陷るのである、誰もよく云ふことである、殆んど九分九厘たしかの樣に思へど、一分一厘不足の樣に思へる、も少し分からぬといふ樣に考へて居る人がある、是か亦大なる誤である、眞實と權假の別は、かく部分的の關係ではない、若したとへば書畫の鑑定をするに、是は九分九厘までは眞に近きも一分だけ、たしかに眞物でないところがあるといふならば如何、一筆加へて眞筆にするといふ譯には行かぬ、殘念ながら、全體怪しいものと言はねばならぬ、權假の信仰といふが即ち是である、然らば如何にして眞實に轉入するかといふに、即ち此の如く自分の全體が作りものである、假想である、理想である、思ふて居るのである、虛假である、不眞實である、不淸淨である、といふことになる、かくの如き場合に於て實に自分自身の失望は一方ならぬ、私なども、長い間此見地に止りて居りて理想假想の信仰に止りて居りたのである、而して今までの信仰が不十分であるといふことに自覺したるときに、一面には、今まで眞の信仰を有せるものとして法を說きつゝあつたのが申譯がない、穴にも入りたい心地である、佛祖に對しても相濟まぬ、信者に對しても面目がない、況んや私の如き遠慮なく、此點を指摘するときには、如何に平素私を信認して居る人でも、必ず大反抗の心を起す樣になる、私の如きも一面には申譯ないと言ひながら、他の一面には信仰が失はれて殘念なとか、吝いことをしたとか、ともかく我慢勝他名聞利養の心が起るのである、そこで私が頂かして貰ふたのは、此自分が濟まぬ〳〵と思ふ心も、殘念々々と思ふ心も皆知り拔きて、他人は誰一人同情して呉れるものなきのみならず、かくの如き我心を知りたならば必ず必ず見捨てるに違いないあきれるに違いないに、却て之を見捨てざるのみならず、飽まで其孤獨よるなきを憐みて御見捨なき御慈悲が如來廻向である、選擇本願である、佛かねてしろしめしてである、煩惱具足と仰せられたのである、返へす〳〵も注意すべきとは佛かねてしろしめしてと思ふて喜ぶのではない、喜ぶと喜ばぬとは問題でない、全體佛かねてしろしめしてと思ふのか、眞實佛かねてしろしめすのか、明らかに我等無明の大夜をあはれみまし〳〵て、あらはれたまふ如來は、煩惱具足の凡夫の我等はいづれの行にても生死をはなるゝとあるべからざるを憐みたまひて選擇本願をたてたまひたのである、我能く汝を護らん、すべて水火の二河に墮せんことを畏れざれと宣ふのである、

是即ち無碍光如來である、不可思議光如來である、一如法界のみやこより來生して法藏菩薩と名乘りたまひたのである、是眞報身である、選擇本願である、南無阿彌陀佛である、思ふのではない、假想するのではない、喜ぶのではない、難有がるのではない、明らかに知んぬ、是れ凡聖自力の行に非ず、故に不廻向の行と名くる也、大小の聖人、重輕の惡人皆同じく齊しく選擇大寶海に歸して、念佛成佛すべし、善きも惡しきも眞に見捨てたまはぬ親心一つである、同一念佛無別道故、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよき人のおほせをかうふりて、信ずるほかに別の仔細なきなり、四海兄弟唯天日のかゞやくのみである。南無阿彌陀佛々々々々々々々。

嘗て一親友の修養深き人が、とかく美はしき法悅と眞面目なる實行とに驅られて、眞の慈悲に接することがなかつた、しかるに子を喪ふて無限の悲哀に沈めるとき、無限大悲の選擇願心を聞きたる一念信樂開發して、感泣して曰く、嗚呼本願招喚の勅命今こそ明らかに知られた、待兼ねたまふ親心の難有や、今から思へは今迄の法悅は皆權假の信仰であつた、聖道權假の方便に、衆生ひさしくとどまりて、諸有に流轉の身とそなる、悲願の一乘歸命せよ、嗚呼ひさしく權假に止りてゐたと。私は此告白をきゝて暗涙に咽び、且つ慚愧した、私は此友のかく假の信仰に止るとを知らぬのではない、そして友も眞面目に道を求められた、予も說きて最後徹到の一念に至りて遂に話が達せなんだ、そして八釜敷く言ひすぎる私も、何時も此處を說破徹到することが出來なんだ、そしていよ〳〵眞の御慈悲をいたゞいてから告白せらるゝをきくときは、平常八釜敷すぎると言はれて居る私が、猶友人の假の信仰を轉ぜしむるに私があまりに氣兼しすぎた、遠慮すぎた、端竟するに不親切であつたといふことである、此の時私はなぜ、もつと一世に對して直言忠告をせぬかと自ら耻かしく感じた、こは既に一年有餘年前のことであるが、爾來此友人と萬事人生に關する所信に於て兩々相照すと、實に響の相應するが如くである、抑々信仰の見地より人生の問題に對して一定の意見の確立せぬは、即ち所信の定まらぬは、信仰の徹せざる證據である、よく〳〵氣をつけねばならぬことである。

言ふまでもなく眞の信仰の徹したる著しき反應は、眞の罪惡觀の發露である、眞の御慈悲の徹するといふは、我等の不眞實不淸淨の心が如來の淸淨眞實に負けるとである、いかにしぶとい罪惡深重の私も、如來の見捨てたまはぬ御眞實の深きに負けて仕舞ふて頭が下がるのである、奥山に枝折々々は誰が爲ぞ、親の身すてゝかへる子の爲、如何に親をすてつゝある私も、他迄我を見捨てざるのみならず、猶親心を徹底せしめずば止まぬといふ五劫思惟の御苦勞、不可思議兆載永劫の修行は、我が貪瞋痴に對して欲覺瞋覺害覺を生ぜず、欲想瞋想害想を起さず、我が麁言惡語に對して、和顏愛語にして而も意を先にして承問したまひ、我が煩惱具足に對して功德成就せしめたまひて、あらはれたまひし南無阿彌陀佛の親心は私一人のためなりけりと眞心徹到して、廻心懺悔し奉るばかりである、和讃に曰く、

釋迦彌陀は慈悲の父母、　種々に善巧方便し、
われらが無上の信心を、　發起せしめたまひけり。
眞心徹到するひとは、　金剛心なりければ、
三品の懺悔するひとゝ、　ひとしと宗師はのたまへり。
五濁惡世のわれらこそ、　金剛の信心ばかりにて、
ながく生死をすてはてゝ、　自然の淨土にいたるなれ。
金剛堅固の信心の、　さだまるときをまちえてぞ
彌陀の心光攝護して、　ながく生死をへたてける。
信仰の一念攝取不捨の利益にあづけしめたまふのである、攝取不捨といふは眞の信仰の特徵である、往生一定の決定心である、初より何時となく、唯光明中に居るといふのではない、御慈悲をいたゞきたる一念たしかに御慈悲に因はるゝのである、疑ふと思ふても疑へぬのである、逃げやうと思ふても逃げられぬのである、かく一たびいたゞきたる已上は自然の淨土にいたらしめたまふのである、抑々自然の淨土といふが即ち眞實の信仰をいたゞきたる結果である、極樂無爲涅槃界である、寂靜無爲の樂である、眞報土である、和讃に

念佛成佛是眞宗　萬行諸善これ假門
權實眞假をわかずして　自然の淨土をえそしらぬ。
信は願より生ずれば　念佛成佛自然なり、

自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたがはず。

眞の報土にいたり、自然の淨土にいたるゆへに、必ず如より來生して還相廻向の利益にあづかるのである、信仰の徹したるものは、人生問題より信仰に入り、信仰より人生にかへるが如く、また念佛より信心に入り、信心より報謝の念佛にかへるが如く、一實眞如の淨土に入りぬれば、必ず衆生濟度にかへり來るのである、しかるに信仰の徹せざるものは、大慶喜心を得ず、佛恩を念報するの心なきが如く、猶自力作善に沈滯す

るが如く、結果も化土に往生して五百歳の中三寶を見聞せぬのである、即ち懈慢邊地疑城胎宮にとゞまるのである、これ化土には還相なき所以である、しかれども此處に大に世の教權者流に警告せねばならぬことがある、他の信仰につきて教權的に壓迫せんと試みるの人は、其人が未だ眞の御慈悲に徹せざる證據である、何んとなれば御慈悲をいたゞきたる人なれば、其無限の御慈悲に人を導く心か自然に起らねばならぬ、其同情なくして他の信仰に壓迫を加へんとするは御慈悲の分からぬ證據である、欺異鈔にも邊地の往生をとぐる人つゐには地獄におつべしといふこと、此條いづれの證文にみえ候ぞやと戒められたのが實に是である、そも〳〵十九二十の本願をもて、恰も自力懲誡のごとく心得るが間違である、佛は佛智不思議を疑ふものをも飽までたすけとげんとあるが名號不思議である、誓願不思議である、してみればたとひ假の信仰にせよ、つまり眞の信仰に轉入せしめんがための誓願である、かくの如く考へ來れば決して假の信仰とて之を徹せしむれば即ち眞の信仰である、世のいかなる人にても眞の信仰に徹せざるかぎりは假の信仰に止まるは當然である、夫故三願轉入といふのである、しかるに眞面目に人生問題や信仰問題に傾心するものを壓迫するといふは、自分が眞の御慈悲の徹せざるとを示すものにして、即ち自分が假の信仰に止まるか、猶假の信仰もなくして恐くば名聞利養我慢勝他に止るにあらざるか、戒むべきことである、かく云へばとて青年教家や世の求道者が、知らず識らず假の信仰に止らざるかを顧み、眞の信仰に轉入さしていたゞくことを怠りてはならぬ、こゝに於ておしへざれども自然に眞如の門に轉入するといふ教を味はねばならぬ。眞如門に入りてこそ還相廻向は來るのである、こゝに於て淨土眞宗は往相還相の二廻向の外なきことを明らかに、いたゞく次第である、和讃に曰く、

南無阿彌陀佛の廻向の、　恩德廣大不思議にて
往相廻向の利益には　還相廻向に廻入せり。
往相廻向の大慈より　還相廻向の大悲をう
如來の廻向なかりせば　淨土の菩提はいかがせん。
彌陀觀音大菩薩　大願のふねに乘じてぞ
生死のうみにうかみつゝ　有情をよばふてのせたまふ。
南無阿彌陀佛々々々々々々。

講義

『教行信證』信卷三信釋

（夏季求道會講話）

近角常觀

第九席

信樂釋（現生正定聚生）

一

華嚴經言聞此法歡喜信心無疑者速成無上道與諸如來等。又言、如來能永斷一切衆生疑隨其心所樂普皆令滿足。又言信爲道元功德母長養一切諸善法斷除疑網出愛流開示涅槃無上道信無垢濁心清淨滅除憍慢恭敬本亦爲法藏第一財爲清淨手受衆行。信能惠施心無悋。信能歡喜入佛法。信能增長智功德。信能必到如來地。信令諸根淨明利。信力堅固無能壞。信能永滅煩惱本。信能專向佛功德。信於境界無所著、遠離諸難得無難。信能超出衆魔路示現無上解脫道。信爲功德不壞種。信能生長菩提樹。信能增益最勝智。信能示現一切佛是故依行說次第信樂最勝甚難得乃至若常信奉於諸佛、則能興集大供養。若能興集大供養、彼人信佛不思議。若常信奉於尊法、則聞佛法無厭足。若聞佛法無厭足、彼人信法不思議。若常信奉清淨僧、則得信心不退轉。若得信心不退轉、彼人信力無能動。若得信力無能動、則得諸根淨明利。若得諸根淨明利、則得親近善知識。則得親近善知識、則能修集廣大善。若能修集廣大善、彼人成就大因力。若人成就大因力、則得殊勝決定解。若得殊勝決定解、則爲諸佛所護念。若爲諸佛所護念、則能發起菩提心。若能發起菩提心、則能勤修佛功德。若能勤修佛功德、則能生在如來家。若得生在如來家、則善修行巧方便。若善修行巧方便、則得信樂心清淨。若得信樂心清淨、則得增上最勝心。若得增上最勝心、

則常修習波羅密。若常修習波羅密、則能具足摩訶衍。若能具足摩訶衍、則能如法供養佛。若能如法供養佛、則能念佛心不動。若能念佛心不動、則常覩見無量佛。若常覩見無量佛、則見如來體常住。若見如來體常住、則能知法永不滅。若能知法永不滅、得辨才無礙。若得辨才無礙、則能開演無邊法。若能開演無邊法、則能慈愍度衆生。若能慈愍度衆生、則得堅固大悲心。若得堅固大悲心、則能愛樂甚深法。若能愛樂甚深法、則能捨離有爲過。若能捨離有爲過、則離憍慢及放逸。若離憍慢及放逸、則能兼利一切衆。若能兼利一切衆、則處生死無疲厭。略抄。

前席前々席に於ては『涅槃經』の文を引かれ、今席の處は『華嚴經』を引きて、『華嚴經』中に說かれたる信心の文をお示し下されたのであります。こは佛敎のことに明らかな方は御存知の通り、『華嚴經』には信仰のことが說かれてあり、信の一念に正覺を成就するとの事が言はれてあるのであります。故に此の他力の法門、殊に親鸞聖人のお示し下さる敎えに於ては、『華嚴經』とは意味頗る同じき處がある。否同じきのみならず、『華嚴經』に信心の事を說かれてあるは、阿彌陀佛を信ずる他力信心のことである、との親鸞聖人の思召しなのであります。即ち前席前々席の『涅槃經』の文に於ても、「大慈大悲を名けて佛性とする」「大信心が佛性である」とある、其の大慈大悲は阿彌陀佛の大慈大悲、又大信心は阿彌陀佛の仰せを頂きたる他力信心のことであるとある如く、今此の『華嚴經』の信心も、阿彌陀佛の大悲を信ずる信心のことである、とのお腹なのであります。て之より此の御文をお話するにつき、『華嚴經』本來の意味に引き當てゝ言ふ時は、種々六かしきこともあるのであるけれども、何も殊更六かしく言ふに及ばぬ、私もちと調へて見たのでありますけれども、私にしても調べて一向感心せぬ。寧ろ聖人より言へば、聖人は、あなたの信心の上より其の儘すら〳〵とお頂きなされたる事なれば、寧ろ御文の儘を我々の信仰上より直ぐと頂くが本當である。殊に一々の文字迄が、皆な他力の上にある御言葉故、字句の解釋を主とせず、唯すら〳〵と信心の味ひを先きにして、言ふ可き事あらば、後にて申す事に仕度いと思ふのであります。

二

先づ

『華嚴經に言はく、此の法を聞いて、信心を歡喜して疑ひ無き者は、速に無上道を成らむ。諸の如來と等しとなり。』

全く『大經』の第十八願成就の文と同じであります。即ち「此の法を聞いて、信心歡喜して疑ひ無き者」とは、南無阿彌陀佛の六字名號を聞いて、信心歡喜乃至一念の者である。其の者は「速に無上道を成らん」斯くの如き者は速に佛に成れる、と

いふので、之は成就の文の即得往生と同じてある。「諸の如來と等しとなり」は、諸佛如來と等しき身分にして頂けるといふので、即ち等覺の事であります。併しながら茲で注意す可きは、「等しき」と「同じい」とは、其の間に猶ほ一段の階段がある。「等しい」とは、我々、心は信の一念に佛と同じ分に仕て頂くのであるけれども、身人生に在る上は、佛には此の世に在る間はなれぬのである。此の世を畢り、我身が無くなれば、佛に成れるといふとこで、等しいとあるのであります。こは他力信仰に於ては、大に氣を就く可き處で、此の間も誰か尋ねられたのでありますが、他力の信仰に於ては一念に等正覺の位に至らせて貰ふといふのであるが、併し此の肉身の儘が此の世で佛になるといふのでは無い。今氣のついた儘を申しますに、信仰には兩面がある。先日來お慈悲を頂かれた方々は、之迄種々人生の苦惱に惱め、吾が身の惡しきに苦み、又は自分の僅かなる善を賴みと仕て居つた處に、計らずも遣る瀨無き大悲のお心を聞く一念に、恰も地震で總ての建物が一邊に倒れ、光景が一變した具合に、今迄の人生相對界の總てのものは皆な仆れて仕舞ひ、人生眞に有難きものは唯此の廣大のお慈悲丈けぢやとなりたのである。すると茲で動もすれば、我ながら我を、佛とも言はゞ言へる如き思ひが起つて來るのであります。歡喜の一念には兎も角人生相對の繫縛から離れられるの故、昨日迄の苦しみは、何故あの如き小事を苦に仕て居たかとなり、禪家に於ては見性と言ふが、餘宗に在りては即身成佛と言うか、敢て自から佛になつたと言ひても、左程遠慮するに及ばぬ、といふやう考が出て來るのであります。すると茲が大事で動もすれば茲で一面に、「自分はもう悟つた、信仰を得た、自分は之てよい」とやうの考が起つて來易いのである。すると頗る危險なのであります。他力信仰に於ては、我々自分が佛に成るといふことは無い。夫れは如何にも彼の佛のお慈悲頂いた一念は、人生長の迷ひの根本を斷ち切るので、そこは如何にも横超斷四流である。故に如何にも此の世で、廣大のお慈悲聞き、安心した有樣は著しきものあるが、併し夫れは茲て長の迷ひが切れ、未來佛と成るべき資格を得たといふもので、未だ佛に成つたと言ふのでは無い。茲は大に氣を附くべき處なのであります。夫れ故信後と雖も矢張りもとの煩惱妄念はあり、性格ものこるのである。併し遣るは遣るが、夫れは恰も空に浮き雲の遣るが如く、又根の切れてある草木の水中に在りて花咲く如く、其の根底に於ては根は切れて仕舞うて居るのである。て親鸞聖人も『歎異抄』に於て煩惱具足の身をもてすでにさとりをひらくといふこと。この條もてのほかのことにさふらふ。云々。

夫れ故我々何うあつても、煩惱具足の身を以て悟りを開くとは言へぬのである。何れ丈け私共安心しても、煩惱妄念は止まぬのであります。て他力信仰の者は、いつ如何なる場合に於ても、「自分が惡るかつた〳〵」と、廣大の御慈悲に對しあやまり果る。之が他力信仰の最も長所、最も特色なのであります。

三

能く今日の青年者は、「自分は絕對の心持に到達した」など言ひ易いのであります。之に就き私は能く理解が出來る故言

ふのでありますが、先年起つた伊藤證信氏の『無我愛』の實驗であります。私は彼の實驗を非常に尊んで居るのである。併し遠慮なく批評するに、彼の實驗は無我愛を自分が體得したとなつた爲め、遂に倒れたのである。彼の人及彼の一味の人が苦んで居らるゝ處は、茲なのであります。夫れは自分が無我愛を體得し、自分が佛に成つたとなる故、佛に成つた以上は過去の惡しさが再び出て來ぬ筈である。衝るに夫れが再び出て來る處から、自分は充分、偉らくなつたと、高上り仕た時、再び倒れたのであります。禪家で故峨山和尚が「相撲を取るなら寢て取れ、初めから寢て懸れば敗けやせぬ」と言はれたといふ話がある。處が多くの者は「自分はもう信仰を得た、さあ來い」と、力んで懸るから、如何なる人もいかぬのであります。處が他力信仰の味ひは「自分は實に惡い者である、煩惱具足の惡凡夫である。今迄罪惡深重は十方衆生皆な並て、自分も其の一人だ位ひに思うて居たは、何たる不謙遜極まることであつたか」と、信の一念に人間の眞價は、罪業深重の度し難き者であることが分り、廣大の御哀れみに謝り果てる。すれば信仰に入れば我が身の惡しさに頭が下り、人から馬鹿にされるかといふに、廣大の佛力を頂くといふ點から言ふ時は、自分は斯くの如く、きたなき、穢れ果てたる、蛆虫同樣の者である。然るに其の蛆虫同樣の者が、廣大の慈悲で、其の者を見捨て給はぬ遣る瀬無きお惠みを知らせて貰ひ、滿足した時は、佛は此の者を實に「我が子である」「佛子である」「眞の佛弟子」である、又諸佛菩薩は斯の佛のお慈悲を知らせ貰ひたる者は、「吾が親友である」と仰せられる。即ち見る影も無き自分をば、見捨て給はざる廣大の大悲より、長々御苦勞して今日迄待ち兼ね下さる、五刼思惟兆載永刼の御苦勞は、此の蛆虫同然の私一人の爲めの御哀れみとあつたと、頂くと、實に自分は極惡深重の蛆虫同然の奴なれども、其の者が其の佛の長々の御大恩、大慈大悲を一体に受け、即ち偉大なる佛全體が、皆な私の爲めに與へられるのである。斯くして有難やと安心する所は、實に佛の不可稱不可說不可思議の功德が、行者の身に充ち滿ちて下さるのであります。すると、形は穢れたる凡夫なれども、お慈悲を頂いた手前より言ふ時は、即ち佛と等しいのである。肉體は何處迄も有漏の穢身にして、他く迄も煩惱の入れ物である。故に此の身は何處迄も煩惱具足の凡夫なれども、其の者がお慈悲の上よりは佛と等しき身分に仕て頂いたのである。斯く他力信仰は一面よりは極端に頭が下り、一面より無上の自信力が顯はれ來るのである。即ち世間的に言へば、謙遜といふ上よりは絕對の謙遜、又自信の點よりは、絕對の自信を生じ來るのであります。

四

實に他力信仰は、斯く一方よりはひどく頭が折れ、一方よりはかゝる意張りで無く、眞の自信を生じ來るのであります。併し茲は頂きぞこなつたら、夫れこそ始末に畢へ無くなる。若し眞にお慈悲頂かずに、唯形丈け頭下げて居るならば、それこそ僞善の極である。若し差し障りの無い爲めに唯ハイ、ハイ、言つて居るなら、實に狡猾なる遣り方である。又眞にお慈悲を頂くて無しに、唯空に力んで居るならば、夫れこそ實に

剛慢である。之れ皆な此の者を見捨て給はぬお慈悲を、眞に頂かぬ處より、出て來る間違ひであります。故に他力信仰は、眞に佛の御哀れみを腹一杯頂かせて貰ふ所が無くてはならぬのである。

さて斯く他力では、此の世で佛に成るとは、どんな事ありても言はぬ。此の世では佛と等しき身分に仕て頂き、未來淨土に入つて、初めて佛には成らせて頂くといふ。之は『和讃』にも、

信心よろこぶそのひとを、　如來とひとしとときたまふ、
大信心は佛性なり、　佛性すなはち如來なり。
如來すなはち涅槃なり、　涅槃を佛性となづけたり。
凡地にしてはさとられず、　安養にいたりて證すべし。

とありて、此の世では信心頂いた者を如來と等しいとお說き下され、彌々佛性を顯はすは、未來安養に往つてからだと相示し下さるのである。即ち信の一念に於て此の世に在りては正定聚不退轉の位に住し、彌勤菩薩と同じ果報に仕て頂き、生命畢れば淸淨土に入りて報土の眞身を得證すると言ふのであります。處て之が今いふ如く、眞に信心頂いて言ふなら間違は無きも、眞に頂く處無くして言ふと、間違ひを來すのであります。

五

先づ從來說敎を聽き慣れて居らるゝ力は、信心を得たとて人間は變らぬのだと言はれる。信心を頂いた後とて根性はもとの通りの人間故、信心を得たとて、得ぬ前と更に變なりは無いのだと、言はれるのであります。して其の信心とは何ういかといふに、死ぬと極樂に往生すると決定することだと合點して居らるゝ。之では如何にも變はる所無い筈なのであります。全體變らぬとは、信後と雖も矢張り舊によりて淺間しきこと、煩惱具足の凡夫なる事が變はらぬといふのでありますけれども、併し信の上からは根底に於て煩惱の根が切れてある處、此の點大變りがある可き筈なのである。花は地上に在る花も咲き、瓶中に挿した花も咲く。咲く丈け見れば咲くに變はりは無けれども、地上の花と瓶中の花とは、根の切れてあると居無いと大變りがある。元來眞にお慈悲を頂いた人なら、廣大なお心に接した一念、今迄の心中煩惱の根が切れ、變はるが當然なのであります。然るに變はりが無いのだと思うて居らるゝ方は、其の實煩惱の根が切れも何うも仕て居無いのである。夫れ故夫れ等の人にありては「其のやうな淺間しき者が、極樂に往けると思ひ定むるが信心ぢや」といふやうな事になる。夫れでは信の一念に於て、正定聚の數に入るといふ所が更に無いのであります。て夫等の人にありては死ぬ時が最も肝腎になつて來る。死ぬと極樂に往けるといふ處が信仰の極所になつて來て、信の一念にお慈悲を頂くといふ味ひが更に無い。『正信偈』には

貪愛瞋憎の雲霧、常に眞實信心の天に覆へり。譬へば日光の雲霧に覆はれるとも雲霧の下明かにして暗み無きが如し。

とあつて、成る程信後と雖も貪愛瞋憎の雲霧はかゝる事はかゝる。かゝるけれども雲霧の下明にして暗みが無いと、明に示されてあつて、暗みあると暗みの無いとは、大違ひである、斯く貪愛の雲霧懸るけれども、其の下明かにして暗み無いと

いふ處が無くてはならぬのであります。で信後と雖も種々煩惱は有ることはあるけれども、眞にお慈悲頂いた上からは、根底に於て根が切れ、生死の迷ひから全く離るゝ處があるのである。他力信仰に於て、信の一念お慈悲の中に攝取さるゝといふ味は、即ち茲なのであります。然るに此の煩惱の根が切れ、變はる處が心に確かり頂けて無い人が、從來の同行信者中には澤山ある。夫れ故夫等の人にありては、信心々々と信つて居ながら、結局信心とは極樂往生と思ひ定むる處が信心ぢや、とやうのことになり、何時迄經ちてもはつきり句切りが着かぬのである。前席に於てやい〳〵喧しく申しても、結局茲一つを申したかつたに過ぎ無いのであります。で斯く他力信仰には、信の一念明かに自分の心持ちに變はる處があるのである。

猶ほ遠慮なく申すに、總ての人が家庭問題で試めさるゝが最もよいのであります。老人が寺に參詣し、寺で念佛稱へてる間は心安らかであるも、家に歸へれば忽ち面白く無いとの念が往來するやうならば、其の信心は頗る危ういのである。何故なれば眞にお慈悲頂いた者なら、斯る家庭の五分々々の爭ひに何時迄も附き纏ひ、あーかう言ふ事無い筈なのである。何故なれば眞に片方にお慈悲頂けば今迄の五分々々の源が斷たれる故、必ず心に「らくな處」が出來て來る。若し夫れて無いなら、甚だ怪しいのであります。爾るに茲で從來の大低の人は、「信心頂いても善し惡しの煩惱は止まぬと仰せられるから」と、甚だ横着に構へて居る。そんな事決して信仰には無い。寧ろ今迄善し惡しと言つて居つた者が、廣大のお慈悲頂けば、

「人の惡しきは自分が惡しかつたのである。人の隔てたは、自分が隔てた故人も隔てたのである。自分ぢやとて今も決して善く出來るとは言へぬ」と、強ち家庭の不和が心地善くは無けれども、其の間をお慈悲一つに安んじて行けるが信心の有樣である。こは從來說敎を聽きつけた方——又青年者でも信仰慣れのした人の間に之があるから、大に注意仕なければならぬのであります。

六

又他の今迄聽き慣れて居ぬ人の側——必ずしも青年の人で無くても、今迄聽きつけて居られぬ人の側に對して注意す可き事は、夫等の人は一念ポッとお慈悲に氣がつくと、「自分はもう之れで得た、もう之でよい」との考を起し易いのである。全體自分は彌々煩惱具足の仕て見やうなき凡夫なる事を知らせて貰うたが信心であるのに、其の一念に反對に、「自分はもう悟つた」、「もう分つた」、「もう偉らくなつた」となる故、茲で再び疑ひを起し、又々悲觀に沈むとなるのであります。何うかと言ふに、先づ夫れ等の人は、誰れ彼れに此の自分の頂いた味ひを知らさねばならぬとなる。處が思うやう人が聞いて呉れゝばよいのであるけれども、矢張り自分が久しく分ら無つたと同樣に、人も中々聞いて呉ぬ。すると夫れ等の人達は自分は信仰を得て變はつて居るに、人が其の味ひを了解して呉れぬと、頗る面白く無い。自分の信仰を傳へやうとして、却つて又々煩惱が起る。之はをかしい、何うかしたのか知らぬ。之は自分は信仰を得たと思うてたけれど、得て居無つたのか知ら、と斯う言ふ風に苦しむ人が多いのであります。之

は初めの一念に自分は、もう善くなつたと高上り仕た故、再び墮ちるのである。先き程いふ如く、『無我愛』などの仆れたが即ち之れなのであります。

夫れて私の能く言ふ事でありますが、信仰の形式に、三角形の頂點で立つたと、底邊で立つたのと二つある。頂點で立つた方は不安定で、一點何か觸るゝものある時は、忽ち仆れる。一寸何か事あると、一邊に引くり換つて仕舞ふのである。處が他力信仰は底邊で立つ方である。初めから倒れてる故、何か事あると重みは底邊全體で受ける故、どんな事ありても倒れる事が無い。處が青年者や初めて信仰を經驗せらるゝ人の多くは、此の頂點で立つ方で行かうとするのであります。現に私なども長らく之で苦しんだ。私は信仰に這入つた當座、「自分は之れで眞實の信仰を得た。此の上は何うか國家、政治の上にも此の信仰で」と、一時大に主張したのであつたのでありますけれども、何うも思うやういか無つた。之ではいかぬと今度は個人々々に法を說くやうに爲たのであるけれども、夫れても矢張り思うやういかぬ。十年やりて、とうど駄目だと分り、翻つて見るに、初めから人に說く位の事で思うやういけると思うて居たのが大間違ひであつたのである。思ふやういかぬ處が、最も難有き處であつたのであります。

七

又親鸞聖人には此の事がある。御弟子中思ふやう信心を聞かれぬ人があつた。此の時聖人の御言葉には、「親鸞は凡夫の身として、人を信仰に入れやうなど思うた事が無い。我々凡夫である以上、人を信仰に入らしむるなどの事、到底出來ぬのである。思ふやう衆生化益出來るは淨土に參らせて貰つた上の事である」と。處が御存知の如く其の聖人に刃向うた辨圓を初め、皆な信仰に入つたのであります。併し茲で聖人は、辨圓を信仰に入れてやらうなどゝの思召は微塵も無い。又或人は嘗つて、自分の兄及び兄嫁に對して、出來る丈け善く盡して往かうと考へ、遂に自分の考を兄に思ひ切つて披瀝したが、思うやう用ゐて呉れぬ。遂に其の爲めに苦しんで信仰に入つた人もあります。斯く之れから考へると、思ふ通りに仕て往かうなど考へて居るのが大間違ひである。信心は思う通りにして行く事で無い。思ふやうにならぬ苦しき人生に、お慈悲一つに滿足して、其の中に安心して行ける處が、信心であります。故に飽く迄も、此の身は虛假不實の淺間しき身なる事を忘れてはならぬのである。

又能く青年者の間には、「信後眞實の意味で政治實業を行はう、眞地目に實行しやうと思ふても、何うしても本當に行かぬ。」と歎く人があります。之に就き此の間も或る政治にたづさはつて居る人が來られて、「政治家の仕事は何うしても人生五分々々の爭である。此の間に立ちては何うしても思ふ行かぬ」と言はれた。そこで私は「行かぬといふは夫れは信仰前の事にて、信後初めて夫れて行けるのである」と話したけれども、併し其人は何うしても行かぬと言はるゝ。そこで私は「イヤ然うで無い。信後は何にしても皆な夫れが信仰の上より行けるのである。蓮如上人の『御文』には、

まづ當流の安心のおもむきは、あながちにわがこゝろのわろきをも、また妄念妄執のこゝろのおこるをもとゞめよと

いふにもあらず。たゞあさなひをもし、奉公をもせよ、獵すなどりをもせよ、かゝるあさましき罪業にのみ朝夕まどひぬる我等ごときのいたづらものを、たすけんとちかひまします彌陀如來の本願にてましますぞとふかく信じて云云。

とあつて、爲る事に於ては即ち商賣をもせよ、奉公をもせよ、乃至獵すなどりをもせよである。即ち爲る事に於ては、譬へ如何なる事を爲やうと、唯肝腎なるは次きの「斯る淺間しき罪業にのみ朝夕惑ひぬる我等如きの徒ら者」をとある一言である。眞にお慈悲頂いた者なら此の考へがあるから、此の上より政治であれ、實業であれ、必ずやつて行ける筈である」と話した事であります。されば、とて信仰前と同じ事を造るては無けれども、併し信心頂い者に於ては、自分は實に罪惡生死の申譯無き者といふ頭の折れた自覺がある。之があるから人の罪惡に對しても同情の心が屆き、社會の腐敗に對しても彌々共にお慈悲を仰かなければならぬとの心が起り、其の間に立ちて安んでして、大悲の道を辿らせて頂く事が出來るのである。若し之が無いと、即ち自衞の爲め社會の間に立ち難いやうな信仰になる。彼の田園生活を樂むなどの信仰は、天下道ぜざる無き信仰とは言へぬのであります。故に苟も信仰の上からは商賣をするのも罪惡なれば、田園に在りて土をほじくるも罪惡である。月給取りて衣食するも罪惡なれば、米を收りて喰ふ百姓も罪惡である。假りにも地を踏み足のゆく處、人間は罪惡ならざるは無いとの自覺が無くてはならぬのである。こは重に信仰を理想的に考へる青年諸君の爲めに申したのであります。

八

處が此の話は、同行信者の人には成る可く聽かせ度く無い。何故なれば、同行信者の人は、斯く言へば直ぐ「人間は信仰頂いても少しも變はらぬのである」、「家庭の不和は人間だもの有る筈ぢや」とやうに言はるゝ。之を押し進むれば、結局人間は商賣する爲めには虛言も已を得ぬ、ペテンをやらなければ、政治家として立て無いといふ事になるのであります。處が然うでは無く、我々佛のお慈悲を頂けば虛言を言ひ度くても虛言が言へぬのである。今茲て虛言言ふとよいと思ふ處でも、何うしても夫が口から出ぬやうになるのである。言はぬと勤めて言はぬので無い。言はうと思うても言へぬのである。之から言うと同行信者の方が、せめて〳〵の思ひより日暮をたしなむなど言はるゝは、勤めて善事を修するもので、甚だ感心せぬであります。眞の信仰の上からは、譬へ人が見て居やうが見て居まいが、出來ぬ事は出來ぬのである。此の人の見て居ぬ處でも、出來ぬ事は出來ぬとなる處が他力信仰の生命である。斯く他力信仰は廣大のお慈悲を頂いて、實に今迄は申譯なかつたとなつた一念には、動かす可らざる處を生じて來る。然るに茲をお慈悲さへ頂けば惡い事しても障はらぬのだといふ風に言ふは大間違ひである。勤もすれば此の世で正定聚の分人を言ふ人の中には此の取違えがあるのであります。

さて斯く今日は一方理想家は、「人生は罪惡の鄕である、」「自分は不完全極まる人間である」との自覺が欠けてあるめ爲

故に、此の世て無理な要求を抱き、其の極、惡平等を實現せんとして苦しむとなつて居る。危險思想などは茲から胚胎するのであります。又一方眞宗の特色は、信の一念に於て廣大のお慈悲に罪惡の頭をひしがれるといふ處を頂かず、「眞宗は獵すなどりしてもよいのだ」といふ風に言うて居る方の側は、知らず識らずの間に罪惡を許すといふ風になりてある。て遠慮なく言ふと、今日眞宗繁昌の土地程彌々横着に流れ平氣で惡い事やるといふ風がある。先日も或人が來て言はるゝには、「人は皆な都會は善く無い、田舍は質朴てよいと言ふけれど、今日は反對である。選擧の時など東京は正直てよい。田舍程平氣て不正な事をやる。田舍はあれほど口に念佛を稱へ、如法にやりながらも、實にひどい事をやる」と話した人があります。斯く眞に佛のお慈悲に頭が下つたて無い間は、此の兩者何れかに陷入るのである。先程言ふ如く『無我愛』などのあれ程やりながら倒たれも、理想に傾いた爲め遂に困つたのであります。

九

又一方人生の出來事は何も彼も佛のお慈悲だといふ人がある。之れだと其の極妙な事になり、社會の秩序も立たぬば、自分の意見、所信も立たぬといふやうの事になるのであります。譬へば茲に一問題あるとするに、信仰の上からは、何うてもよいといふ問題は一つも有る事無い。茲は此間も或人に尋ねられたのでありますが、信仰の上からは、之てもあれてもといふ事は無い。之れだと一つ決つた道があるのである。併し有つても出來ぬと言はるゝも、出來ぬても之れだといふ。道が無くてはならぬのである。茲は明かに區別がある。併し其の代はり其の爲めに仕て見やう無いといふ時が、出て來るのであります。茲は能く世間に信仰の結果に御都合主義といふ事を言はれる。自分の都合好い時は出て來て、都合の惡しき時は引込んて居るといふ、此の御都合主義に落入つてはならぬのであります。信仰は此の點何處迄も實に眞地目である。

其の代はり一面は何處迄も頭が下つて居るのであります。例へは茲に我々が無實の罪て、世間から誤解を受けたとする。夫れを言ひ開きすれば夫れ迄なるも、信仰の上からは何うしても心中言ひ開き出來無い處がある。夫れは何故かといふに、汝の然う思ふは名譽心の爲めぢや、と心に一點氣がつくと、例へ何んと言はれても辯解の仕て見やう無い。自分の心を押えると、何うしても佛に對し、罪が無いと言はれぬ處がある。先年教科書事件の時、或人が全くの寃罪て拘引せられた。其人、氣がついて見ると、事實は全く無い事であるけれども、自分ぢやとて全く卑劣な考えを持つて居ぬとは言はれ無い。佛に對しては、何うしても無罪と言はれぬから、其人法庭て夫れから無罪を辯じ無つた。之を其の人が道德的の考えでやつたのなら値打ちは無い。處が無罪々々と言うてる中は開かなかつたけたども、默つて仕舞つてから無罪と分つて來たといふ事があります。實に信仰は斯くの如き有樣である。故に信仰は決して言葉や必の綾や、心の慰みて無い。明に人生に大悲の眞のお惠みを頂いて、自分の罪深く申譯無き事を知り、其上より廣大の御哀み一つて人生に立たせて貰ふ事である。以上は先日或人より現生正定聚の味ひにつき、お尋ねがあつ

たから申したのであります。

で要するに從來より聽き慣れて居らるゝ多くの方は、死ぬと極樂往生といふとこに重きを置かるゝ傾きがある。之だとすると、彌々救濟を蒙る時は死にしまとなる。處が親鸞聖人は信の一念に夫れ切り即得往生である。氣がついた一念に此の世から生死の根が切れ、末來佛となる可きものと決まつて居る故、死ぬ時の事を兎や角言ふに及ばぬと仰せらるゝのであります。即ち平生業成とお示し下さるは玆である。併しながら之は口先きばかり言うて居る者の事で無い。眞にお慈悲の頂いた者の事であります。て以上申す事につき親鸞聖人も『歎異抄』に、再々お示し下されてある。即ち初めに申した「煩惱具足の身を以てすでにさとりを開く云々」は、「此の世でもう悟りを開いたのである、此の上は惡い事仕ても善いのだ」との間違ひに對してお示し下されたのである。又

一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしといふこと。云々の御敎化は、「信の上は念佛稱へ〳〵善く仕て行かねばならぬ」と思ふ間違ひに對してお示し下されたのであります。猶ほ申せば聖人は信の一念に「前念命終後念即生」と迄御示し下さるのである。之など信の一念に、眞實此の世の生命畢るといふ事にて、眞實佛のお慈悲に生れかはらせて貰うた者でなければ何の意味だか分らぬ。私は恐らく聖人十九の御時、磯長聖德太子の御廟にて「汝の命根應に十餘歲なるべし、命終れば速に入る淸淨土、善信々々眞菩薩」の告命を受け給ひ、十年經つた二十九の時は生命終る積りでお出てになつた處に、計らずも法然聖人にお遇ひなされて、信の一念に意外にも此の世の生命畢り、お悲慈の中に安心なされたのである。此の御經驗より此の御言葉をお用ひになつたと思ふのであります。て我々の往生は、反す〳〵も此世で信の一念に決まるのである。して此世に在る間は佛と共に生活させて頂くのである。實に一面非常に貴き立派なる日暮をなさせて頂くのである。併し此の立派さは此の世を畢り、極樂に生れさせて貰うた上の立派とは別なのであります。

而して以下お話する、今席の『華嚴經』の文が、皆な此の意味て信仰上より書かれあるのであります。(未完)

「此の講義次號に續く」

拜啓殘暑嚴敷御座候處、先生初め各位增々御健勝にて、御靜動の御事と奉賀候。却説先般夏季求道會の御りは非常なる妙法味を惠ばせて頂き、殊に御厚遇を蒙り何とも御禮の辭これなく候。南無阿彌陀佛。その節御話し申上し通り、小生儀對州萃見轉勤を命ぜられ、去月廿四日往みなれし熊谷を出發いたし、赴任を急ぎし爲め、東京の恩師を御訪ひ申さず、直に京都に向ひ、大阪をへて福岡にて船便をまつ間に、上田樣を市外西新町に御伺ひ申候。三十日夜博多港出帆の萱薬丸に乗り込みし處、海上浪怒り風吼りて、乗客悉く船暈を起し、小生等三人も人心地なき迄に醉ひ申候。唯だ〳〵大悲を喜ばせて頂き、卅一日琴港に上陸致し、流行症のありしため四五日小鹿濱に滯在の上、左記に着任仕り候間乍他事御省慮下され度候。先生實に當地は不便にて、島中峻嶮隘坂を以て村々を區劃せられ組師の背を隱ばれ申候。南無阿彌陀佛。……なほ同朋諸彦に小生の左記に在るを御照介を願上候。

長崎縣上縣郡琴港萃見本願寺出張說敎場駐在

山崎震雷

告白

不可思議善巧方便

大原愚老

私は第三回夏季求道會に上京しまして、七月四日より十二に迄御育に預り、十六日歸鄉の節至急告白を書く樣と仰せられましたが、何分愚僧であり、又老拙でありますから、とても御誌を汚すは恐れ入りたることであると御斷り申上ましたが、夫でも何程文章が拙くとも、有の儘を書けばよいのであると仰せられましたで、御恥しきことながら有體を書かせて頂きます。

私は生後五十日にして父は亡くなられ、母が廿五歲のときから兄二人と私と三人を養育し下されて、七八歲のときより御經文を母に敎へられ、午後は寺子屋に通ひ習字のみ敎へられて、十歲前後より檀家の法事に參りもし、日々佛陀に仕へる習せはありましたが、十七八歲より大阪に出て外國語學校に入り、又堺師範學校に入學して、明治六年に小學校敎員になりましてから、時勢の變遷に醉ひ、佛門の何たるを打やつて仕舞ひ、些少の年給に甘んじ、意氣揚々として日を送る內、今の大原家に入り六人の子を養育しましたが、何分佛門の事故又佛祖に仕へつゝも、只愛欲の廣海に沈み、世の風潮が華美になり奢侈に流れるにつゝを、只物質的の方面に向ふて五欲を滿足せしむるのみに消日いたして居りましたが、國の母は信仰の人でありましたて、時々嚴しく聞法をする樣にと申し下されました。又養父も勸めて下されど、今生にのみふけりてこれ程に早や目に見えてあだなる人間界の老少不定の有樣を氣にかけず、浮々して居る中早くも五十の坂を越えるや、計らず長女にて他に嫁せる者難產にて一夜に母子共死亡し、悲哀言ふべきなき內、又長男の嫁は腸結核病にかゝり、七八月を經て死亡し、又二人目の嫁も肺結核病にて是も六七ヶ月病みて死し、其後二女婿又病にかゝり、半年已上大阪病院に入りて死亡し、養父は報恩講の滿座の畫飯を食ひ終りて頓死せられ、母も又急性肺炎にかゝられ二日は大熱の爲に苦まれましたが、三日目の朝より熱はすつかり無くなり大に快氣なられ、今まで八十年の長命を喜び、只稱名念佛のみにて只嬉しや〳〵尊い〳〵、御慈悲なればこそと、喜び〳〵念佛申され居られましたが、醫師はだめだと申されました。すると四日目の夕方より長男に云はるゝには明日十二時には參らせて頂くから、今晩ぎりだと申されますので、私に其由を申しましたて枕邊に參り、慰安して居りますと、只嬉しや南無阿彌陀佛〳〵と御稱名をして居られます斗り、其晝十一時頃より少し樣子が變りましたて、親類の者近所の者廿四五人枕邊に寄りますと、一度起せと申されますて、長男は背より、私は前より抱へて起したれば、來合す人々に生存中の事を謝し、一大事の後生を早く御頂きなされと遺言せられまして、念佛を喜んで、居られますて、靜に寐かして三誓偈を讀誦いたしました。すると經文の終ると同時に念佛の聲絕ると思ふ中、命終せら

れました。尤も手は胸上に合掌し足は延して動すことなく、顔をしかめ目を開くこともなく、眞に眠るが如き往生でありました。其時は私始め一同大に感じて喜びました。平生左程の喜びは表に見せざれども、内心に深く喜び大に安心は慥なる人でありました。眞に人生をば樂んで居られた老母も、一夜の煙りとなられたること哀れ云べからずでありました。

爾るに悲喜交々到る。七八ヶ月を經たるに又愚妻が衰弱の樣子に見えますから、長男は母は病氣に非ざるかと醫師を迎へて診察を乞へば、恐るべき胃潰瘍と云ふ病氣である。流動物より外は口にすべからずと禁ぜられたれば、本人及看護の者も大に注意して、十餘日流動物にて養生すれども中々快氣に赴きませぬ。日に重きを加へ大に身心を惱ませり。時すでに初夏の候になつてありますから、連日の晴曇定りなし。病人及ひ家内も陰鬱云べからず。段々日を送る中霖雨晴れ、炎暑に趣き、寢臺の敷物さへ厭ふやうになりました。又身體も骨高く露はれ、厭ふ敷物さへ重ねゝばならぬ樣になりました。夫故益々暑さと熱と身體の痛みとにせめられ、漸く朝夕夜分は少し苦みを慰するのみ。煽風器を用ゆれば器械の音と風の絶えざるを嫌ひ、電氣を離せば又暑を覺ゆ。氷を用ゆれども其部のみ冷えて他は一層の暑さに苦み、氷枕も亦湯を入るゝの思なり。看病する者も涙と共に盡すといへども、如何せん土用明きて殘暑殊にあつし。病人は漸々衰弱するのみ。乳も卵も其功なく、衰弱に衰弱を加へて昏睡の狀態に陷り、追々危篤なるに、死する四五日前朝の凉しきとき病人私に言ひますには今朝は大に快く覺えます、仕出屋に命じて酒肴を調へ下され、家内皆々に離別の酒盛を致しませう」と申したて、直に料理店に申付て數品を調へ、生葡萄酒を盃に盛りたれば、其時私の手を取りて、「今生の御慈愛千萬無量厚く御禮を申上ます。爾し來世は如何になり行きますか。私は何處に行きますか、今日迄は離れず別れずと思ふて居りましたを、此已後は何處にて、御目にかゝりますか。慥に聞かせて下され」と申したて、日に拜讀する經釋の通り、檀信徒に咄す如く、「只御慈悲の如來樣の御助けに預るのだ。自分も遠からず順次往生をさせて預きて、一蓮托生の樂みを得させて頂くのぢや。」と申しましたれど一向分りません、どうぞ領解するやうに御咄し下されと迫ると云へども、實は今日まで皆々を教導するには、信心正因稱名は報恩、佛の大慈悲に助けらるゝのである、佛は末世の我等を不憫さに永刧の御苦勞下されて御成就の御本願、即御名號によりて御助けくださるのであると教導はいたしたる者の、蓮師は兼て物を持ずして人に施しは出來ぬと申されし如く、自信なくして女房たりとも教人信は出來ぬ。迷惑して居ると本人の申すにはそれてはあなた未だ眞實の御親樣の御子てはない。夫てはあなたも私もつまらぬてはありませんか。どうぞ早く御信心を御頂き下されて、私を濟度なし下され、幾重にも御願ひ致します。さあ是から別れの酒を呑みませう。爾し私しの死後はあなたも子供等も暫く旅行して諸方參詣して居ると思ふてゝ下され、其内に氣も替るから」と咄を他にそらして、今生の暇をつげて一口葡萄酒を呑み、私に杯を廻し皆々呑みて事すみましたが、私としては佛陀に對し申譯なし。妻を再び三途永刧の迷路に落し、那落の苦みを受

けさすことの不憫さ、又子供等に對しても此年寄る今日迄、佛智を領得せざること何たる人であるかと思はれるを恥ぢ、身の置處もありませず、穴の中に這入りたきやうにもありましたれど、今死する者を見すてゝ他出することも出來ず、枕邊にて病人の姿を見れば、肉落ち骨露はれ、見る影もなき有樣、此時の悲慘は何共申樣はありませんでした。手をなで額を押へなど致し稱名すれば共に念佛は稱へ居れども、慥に御報謝であるや否やは一向分からず、思はず涙頰に流るゝを見て「何を御歎きなさるや、一尅も早く御信心をお頂き下さらば、私は御淨土へ參らせて頂き再會することは遠からず、であります、どうぞ御賴み致します」と憂ふる顏もせず。つく〳〵私の顏を眺めて居るのであります。此時の私の心中はとても人樣が想像出來ることではありませんと思ひます。傍らに居並ぶ子供等は泣き出す。看護婦もなく、眞に悲慘の極めでありました。さうして居る中又世界が暑くなつて來るので、庭に水をまく、屋根に天幕を張る、煽風器を次の間にかける、子供等四邊に水をかけ廻る、氷を額に當る、水を以て身體をぬぐうなとする。何分暑中の病氣でありますから、一層手が掛るのであります。而して三四日すると彌〳〵昏睡に陷り、危篤々々とうど命終したのであります。

すると他人の人々も多く御出下され、葬式も濟みましたが、濟みませんのは私の心中。若きもの三四人なり、兩親なり、妻なり、死亡して跡は三十以内の若きもの斗り、自分ははや六十に垂んとして居る。次は自分である。又愚妻の遺言否意見、暫くも靜坐することも安眠することも出來ず、誰人かに此の事を打明け救濟を得たいと思ふとも心當りの人はなし、どうしようかと青年時代に講釋を聞きたる御聖教先づ蓮如上人の御文章を繰り返し〳〵拜見すれども一向分からず。又『假名御聖教』を拜見するも同く分からず。『教行信證』『三部經』を拜讀すれども、二三十年前に講釋は聞きたれども、中々以て解することなし。さうする中根氣もつき身體も疲れ、とても机にかゝりて頂くことも出來ず、枕によりて横になりランプを引よせて勿體なくも拜見すれども、とても〳〵開發などいふ處に到らず。煩悶苦痛して居るとき計らず當地中學校の先生に安高と云ふ人が、君は求道を讀まれたか、未だなれば我校の牛窪なる先生が讀んで居られるから、御讀みなされと、第七卷を貸して下されたで、直に讀まして頂きましたが、あゝ是れはと思ふて居ましたが、爾し近角先生なる人は如何なる人か、僧であるか俗であるか、又眞宗十派の中何れの人なるかと、先づ人に質問を立てゝ、直に教も人も信じ得なかつたでありますが、段々拜見する中これは僧侶である、大派の御寺樣に相違ないと云ふことが思ひ當りましたで、東京の學舍へ御來舍を問ひ合せましたが、早速御返事を頂きました。其意はこうてある。態々東京まで遠路上京しても解決がつかねばだめだから、春は本山の御遠忌に參詣するから、其節面會すると云ふことてありました。夫れは十月頃てありました。夫から五六ヶ月は一日千秋、長い〳〵、十一月になつた、正月になつた、三月になつた、東京から何の沙汰もない、どうてあらうか〳〵と思ふ内、四月になつた。本月の御遠忌て我等末寺にも御懇志の手廻り、團體參詣の勸誘、何とかざわ〳〵てある中、

我本山は四月九日よりであるから、八日より兄妹等は同行をつれて參詣出勤して、十一日午後十一時着、歸寺の約束にて、自分は十二日一番五時に出立の手廻りをして居ました。すると十一時夕方御書翰を頂きました。十七日には京都花や町法光寺へ行くから來る樣と御知せ下されたて、實に拜顏を得た心持で、兩手をうつて喜び、十二日早々上京。其日より十六日御滿座まで參詣出勤いたし、十七日早朝法光寺へ參上いたしましたれば、早く通れとの事でありました。御居間へ參りましたれば、先生は直に私の處へ御近寄り下されて、如何なる不審ありやと御尋ね下されたて、御恥しき乍ら前々の事實を有體に申し上げたれば「夫は氣の毒千萬である、爾しあなたは夫程御稱名をなさるが、其樣に御念佛を輕ろ〳〵しく頂きなさるは分らぬからである。又其樣に苦んで畫夜御聖敎を頂き、其樣に惱んで居らしやるは、喩へて云はゞ山路を歩行するとき過て崖より谷へ落かゝりたるが如くである。其下をみれば數千尺の谷、四方をみれば絶壁の岩石、下に水漫々としてたゝえ、狼み蛇の如き恐しき惡獸群り居れり。其處へ今直に落込まんとするのである。其時慥なる繩を下して呉れたる者あり。あゝこれと其繩に取付くより外はないでしよう。若此繩下らざればどうして助りませう、只落るより外はありますまい。其の時こそ繩に取付てあゝ嬉しやの外はありますまい。上に誰が居るかどうがこうかの思案して居る餘地はありますまい。今あなた御年から云ふても廻り口は來て居るのでしせう。そして不常の世界今晩も知れぬてせう。我手元を眺むれば深い〳〵煩惱の谷底、貪欲の水は逆まく波を立てゝ居りませう、瞋恚の惡獸は口を開き、牙を出していませう。とても佛性を磨き光りを見出すことは出來ぬてせう、もうして見やうが無いでせう、そこへ久遠刼の昔から其してみやうのない者が可哀さうである、不愍である、捨てゝ置けぬのである、見て居れぬのである、それあぶないと大願强力の南無阿彌陀佛の御繩を御下げ下されて、此名號にて助けてやる、これにすがれと降りて來たら、外を見ることも思案することも、落ることも上ることも、あゝ思へばよいか、こう思案すれば善いか、こう握ればよいかの、手元に思案も分別もの餘地がないでしよう。すぐやれ！とすがるより外はないでせう。それ其ときあゝ嬉しや南無阿彌陀佛々々々と顯れて下さります。夫だけです。爰を『歎異鈔』第一章に「佛智の不可思議に助けられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて、念佛申さんと思ひ立つ心のおこるとき攝取不捨の利益にあづけしめ玉ふとある」と、懇々丁寧に御聞かせ下された時、あゝそうで御座りますか、今まで御經や御和讃を頂き、御佛前に詣でゝ、追從がましき御禮をしたり、御佛飯御花も安心を得よう〳〵と色々苦しんだも惱んだも、皆自力根性で御座りました、あゝ私はかゝる罪惡甚重の罪人て、姿では仕ませぬなれと父を殺し母を殺し、五逆十惡何一つ不足なき罪惡人て御座ります、長々如來の御親樣に御苦勞かけました、御待たせ申しました、申し分はないと、あやまりはてゝ喜ばせて頂きました。そうする內私の心が何とか廣ろ〳〵とした樣て嬉しくて〳〵、何とも此時の心持は筆にも言葉にも顯し樣なき樣になり、涙が流かれて喜ばせて頂きました。

其內御同行もおひ〳〵參集せられまして、先生も朝の御飯を御濟せ下されて、又一同に對して御化導を下されましたが、御座敷に列ばせて頂き居るか何處に居るのか、皆樣が御不審をなさるのがなぜあの樣に申さるゝやらと、何とも分りませんので御座りました。其中時間が來ましたので、先生は御本山へ御參詣、明朝は大谷別院へ參る樣と仰せ下されて、夫て御別れ申し、翌日大谷へ參詣いたしますると、『歎異鈔』の第二章の御演說で御座りまして、數千の參詣人の中、殊に私目指て縷々御說き下され、いよ〳〵佛智の御不思議て御助けに預ることを有難く頂かせてもらひました。夫より日々伏見六角と諸方の御化導を聽聞させて頂きまして、其上先生は聖德太子御誕生地たる大和橘寺へ參ると仰せられましたを、幸ひなる哉我等の門前は是非御通りのことでありますから、御立寄を願ひ藤岡と申す我檀家にて御一泊を願ひ、有緣の人々に御化導に預り、第九章の思召を懇々御知せ下されまして、いよ〳〵信心增上させて頂きました。思へば何たる不思議なるや、高祖大師六百五十回大遠忌、殊に我派は十六日は御滿座、十八日は大派の御開座、中間の十七日の朝數百萬の參詣人の中、是の如く信仰に入らせて頂きたるは如何に大悲の御慈愛の厚かりしや、實に偶然のことではありませぬ。私如き不淨說法の阿毘大地獄の客人、虛受信施の大罪人、今日も知れぬ老ぼれ、明日もしれぬ無常の身を、是迄て御慈愛下されて、此度はいよ〳〵往生淨土の身として頂きたる、何たる仕合やら眞に嬉しいことてあります。南無阿彌陀佛〳〵。

其後一度拜顏を得御禮申上げ數々の御大恩の程を申上度く思ふ內、此間の講習會、七月一日御報知下されたて、直に參詣させて頂きましたれば、先生且つ御家族樣方始め、數多の諸兄姉の御喜び、又御親切、何共嬉しく朝な夕なの聞法樂、これは東京てない學舍てない、爰は全く極樂淨土、皆々樣諸兄姉は全く觀音勢至聖衆菩薩てある、何とも嬉しい俱會一處樂てある、死したる妻は私濟度の菩薩てある、釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便まし〳〵て、有漏の穢身のかはらぬ私を、淸淨國土の住人てあるぞと、眼前に御見せ下された。眞に今日は是につけ彼れにつけ、只御念佛を喜ばせて頂きます。實に嬉しく有難く、仕合者は私の外になきやと、只報謝の稱名南無阿彌陀佛〳〵〳〵。

釋迦彌陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し
われらが無上の信心を
發起せしめたまひけり

病床大威神力を信知し奉りて

出村鉦逸

謹啓、未だ芳顔を拜せず候へども、生は東參の一藪醫。昨春病を得病蓐に臥すること早や一年有餘。昨初冬先生の著書並に雜誌『求道』を拜讀し、不思議に入信の喜びを得候てより以來、彌陀の慈光を仰ぐと共に、先生の恩德を思ひ、未だ一日として忘れたること候はず。生が自分勝手に想察したる先生の溫顔は、絶えず胸裡に髣髴として現はれ候。一度は御禮申上度、且は生の入信顚末をも申し上度と存じ乍ら、病ある身の、意の如く筆取ることも自由ならず、今日、明日と暮らし來たり候。昨今病勢兎角面白からず、遂には今生にての御緣も失せざるやと、何となく心急ぎ候折柄、先達當地同信の女山田らい子出京の節、生の事供申上げ候處、至極御滿足下され候趣き、同女歸國候て悉しく御法話及御樣子など傳聞候爲め、玆に失禮を省みず、一書を裁し先生の机下に呈し候。病中亂筆幾重にも御宥免被下度候。

先生

生の家は代々日蓮宗にて候。十數年前此地に來て醫業を開らき候折、當村は眞宗過半を占め、且は緣家は眞宗寺（大谷派）も有之旁々、佛事を營むにもドーモ日蓮宗にては都合惡敷、依て親達とも相談の上、眞宗に轉宗申候事、代々自家の宗旨を只佛事の便、不便に依りて、平然として轉宗候事、畢竟生始め一家の者共に、宗敎心を左程有せざる徵にて候。又嘗て十數年前鄕里三河國西尾町に於て開業せし當時、家事上に就き痛苦煩悶せしこと有之、宗敎の力にても藉らば、幾分心の靜平を得べしと思ひ、恰度占部觀順老師の在世中とて、師の門を訪ひ候こと有之、其際生は老師に向ひ、地獄、極樂、の存在を、質疑と云ふより寧ろ、詰問と云ふべき、飛んても無き不心得を以て尋ね候事有之、老師の答は如何なりしやは今日記憶にも存せず、又右の態度を以て敎化を受け候とて、何等效果の有之等も無之、漠然として今日、記憶に殘こらず候。兎に角生は前述の如く輕々無意識(?)に自家の宗旨を轉ずると、一代の篤學、篤心の占部考師に、地獄、極樂を質問する程、宗敎に就ては何等の智識を有せず、此拾數年を空々漠々に經過し來れり。「安心」と申す事は何んても人間は惡るい事をせず、善い事をすれば、因果應報のあるもの、之れに依りて吾人は「安心」を得べしとなし、其實道德行爲の一部をも實行する能はず。人間は皆コンナ者と自分勝手に定め、眞宗の說敎は土地柄とて常住有之候も、一二度位しか聽聞申したることも無之、只南條、村上博士等の來村せられたる時は、博士と申す肩書に對して聽聞に參りたる位の事に候。生は二十一歲にて醫師の資格を得候丈け、夫れ迄は至極順境なりしも夫れ以來逆境を重ね、十數年開業候て何等の成效無之、寧ろ不成效に送り來たり候。

先生

玆に佛智不思議と申すべき乎。生は昨年五月初旬突如喀血を以て肺結核を發病致たし候。而も病勢は極めて險惡の徵を

呈し候。肺結核＝喀血、夫れが突如として襲來候事とて、醫師たる丈け夫れ丈け生が心理狀態は御恥かしき程、此際混亂煩悶を生じ、神も佛も無き乎と迄、地團駄踏み申候。夫れは從來生自身には前述の如く、善事、惡事、因果應報の主義を奉じ候に、不幸に不幸を重ね、今亦此不治の難症に罹る。家族は多し、生が亡き後は何等資產の遺すべきなし。遺產所か、病ひ永引けば、一家の生計に差支ゆる危惧を生じ、アレヤコレヤを案じ候ときは、實に立つても坐つて居れぬ煩悶に陷り申候。其の當時の生が心情は、未來所か、現世に此澤山な仕事を遺すこと故、假之一分なりとも仕事を片付け行くが此際の急務と信じ候。サレド病者となりては最早其一分も半分も片付くる能はず、只さへ肺病——神經過敏——は益々高じ、甚だしく些細の家事迄八釜敷指揮し、聽く、嗅ぐの神經は一層鋭敏となり、神經鋭敏なれば病勢從て增惡し、兩々相俟て經過は益々惡敷、遂には肋膜炎をも併發申候。生の氣難しさは益々募り、トウ〳〵母は怒りて親族へ參り、家には歸らぬと申し、飛んだ家庭の波瀾を生じ候。此時此際生は益々世を怨み、人を呪ひ、肉身の親にさへ見離さるゝ此世の情けなさ、人は皆自己の反對者の如く、悲觀奈落の底に落ちたる如き心地いたし候。但し家庭の波瀾は、間も無く收まり候も生が心情は益々ひねくれ申候。

先生

貴著の「慚悔錄」、「信仰の餘瀝」は三年前一度拜讀申候。其時の感想は只熱烈なる信仰家と感じ候位にて、未だ生が胸裡には何等反響を生ぜず候ひし。然るに今生が悲觀の極度に陷り候此際、當村大谷派婦人法話會の評議員も致たし、恰も故奥村イヱ子女史の如き婦人に候。此老女一日（八月中旬頃）見舞に參られ候際、病中消閑の資にもと、一冊の古雜誌を持參せられ候。夫れは先生が主幹せらるゝ雜誌「求道」の臨時增刊「人生と信仰」なる雜誌に候。實に此一冊の古雜誌（古雜誌と申ては先生に失禮に候へども）が、生の入信の端緒、生が內的生活の第一階段を成し候とは、如來の善巧方便と可申乎。

右「人生と信仰」とを拜讀し、フト何となく心の弦線に觸れたると可申か、今迄に無き面白味（面白味と申ては失禮なれども實際當時の心情に候）を生じ、再三拜讀申候。未だ記憶に遺こり候は、先生が該誌中に「信に入るは何れの道より進むも良し、堀り當たる源泉は一なり、只中途にて止みては詮なし」、との語は今迄宗敎方面に智識なき生にも、深く〳〵了解申候。

夫れより「求道」誌を讀み度き希望を生じ、幸ひ本多老師の許に、明治三十八年頃より四十一年頃に亘たる雜誌有之、順次借り來たりて拜讀し、枕頭一日も缺く能はざる感を生じ申候。時は昨年盛夏の頃より秋に亘たり、病勢は惡徵を呈し肋膜炎をも併發し、每日發熱三十八度五分內外、而も日に數回「求道」を手にする狀態にて、病苦を忘るゝこと有之、追々眞宗他力往生の旨趣を了解し得るに至たり候。

先生

先生が熱烈なる御信仰より溢れ出てたる、「求道」誌上の御指敎、殊に「嘆異鈔」に關する御說話は、生をして知らず〳〵

入信の途に導き候。サレド了解と信知とは其間一歩の差ある如く、未だ本願の信知に達する能はず。最初の内の「彌陀とは如何なる者乎」の研究的態度止まず、造物主と彌陀とを混化して考ふる弊止まず。中頃右の態度は自然に消失候へども、未だ「我」と云ふもの存して、全然他力に任ずる能はず、恰も軍隊に於ける新兵が機械體操の如く、手と云ふ「我」を離すに、なか〳〵斷行一番の態度を生せず、之れには自分ながら如何ともする能はず、「我」「自力」の廢捨即ち「信」と云ふことに至たりてパッタリ突き當たり申候。

此當時の煩悶(信と云ふことに就て)は不思議な程劇烈を極め、二六時中絶えず念頭を去らず、而も此煩悶を忘れんとしても腦中を去らず、妙な破目に陷り申候。されど如斯煩悶痛苦は左程病體に影響なきもの丶如く、病勢は少しづゝ退歩の狀態を呈し候。是れ世間的煩悶と出世間的煩悶とは差ある爲めと存じ候。

忘れも致たさず、斯くて夏過ぎ秋去り初冬の十二月四日の夜、母及妻に色々自分が知る限りの他力往生に付て、法話をする丈けの宗教知識は生じ候)其際「自分が今此不治の肺患に罹り命數幾許もなし死後に遺すの資産とては無く、一家路頭に迷ふ危惧を生ずるも、さりとて今に至たり如何ともする能はず。されど假りに萬金の遺産ありとせん乎、矢張り夫れでも種々の危惧は生ずべし。今に於て順はむは如來の大悲なり。如來の外此宇宙間に依るべき方無し。之れが他力往生の旨趣なりと」話は平凡何んでも無き事に候へども、茲迄談じ來たり候時、慄然として胸中に一種の感を生じ候。其感想や言語筆紙に盡し難く、所謂油然として彌陀の大偉力を信知候と可申か。信とは即ち此心狀態か、只々「彌陀ならずんば」との感想を湧起申候。と共に決然爽然云ふ許り無く、以來煩悶を重ねし本願の信知を得、恰も暗より明に出てたる如く、轉迷開悟とは是等の謂乎、徹宵喜悅と喜悅に伴ふ一種の恐怖とに滿ち〳〵夜を明かし申候。今日に於ても當夜を追想候時は、不思議にも同種の感想を湧起するを得候。實に之れが十二月四日と劃然と致たし居候。

先生

實に前述の喜悅と申すは、彌陀の本願の信知、即ち攝取の利益を蒙むりたることを喜び申候。否此時に攝取されたるにあらて、大悲大慈の如來は疾くより其御手を生に掛けつゝありたることなるも、生の方より申せば此時此際勿體なくも其御手に始めて觸れ申候。先生が誌上常に說示せられたる事ども、ヒシ〳〵と胸に當たり申候。南無阿彌陀佛。

先生が嘆異鈔の御詳解の節々今こそ覺知申候。

彌陀ノ誓願不思議ニタスケラレ參ラセテ往生ヲバ遂グルナリト信ジテ、念佛申サント思ヒ立ツ心ノ起コルトキ、即チ攝取不捨ノ利益ニアヅケシメタマウナリ。

其前日迄は南無阿彌陀佛を稱ふることがドーモ出來不申、何んだか體裁の惡るい樣な、恰も兒童が羞かしがる心地致たし候者が、夫れ以來不思議に念佛を稱ふるに至たり、時には知らず〳〵の間に念佛申候樣に相成り候。今迄佛前に拜禮すると云ふことは、佛事の外メッタに無之かりし者が、毎朝無熱

の時を見ては御勤め申す樣に相成り、病勢の弛張はありても、今日迄は佛前の勤行を不思議に相續け居り候。(御文と嘆異鈔を拜讀申候)

自己が從來自分の無力を知らずして、善事をなすを以て「安心」の極意とせし事の自惚れ根生の恥かしさ、已往を回顧候て、名聞名利に走り、虛榮虛利に沒頭し來たり候事、恰も地獄を經過し來たり候感有之候。今や只信の一事にて不幸なる已往の經歷も、只如來の善巧方便なかりしかと感謝の念に充ち、現時の肺患を顧みては、之れぞ逆緣の恩寵と、却て肺患に罹りたることを喜び申候。

先生

前述の一種の恐怖とは、實に自分が今迄彌陀の本願我が爲めの御苦勞を知らず、折角此人界に生を受けたる者が、空々として暮らし來たり、今此本願を信知候て、嗚呼有難やと報謝の念生ずると共に、身は今迄是れ斷崖絶壁の上に立ち盲滅法に歩まんとしつゝありし事の、危險を感じ候事が、今思ひ出たしても恐怖なりしと申す次第に候。

勿體なきかな如來の思召し。

往時を回顧候へば生涯は是れ罪惡の生涯、醫は仁術とは申せ、生が實際の醫術力は何とも御恥かしき程の無力者、能く之れて今日迄安穩に數多の家族を養ひ得來たり候事、不思議の次第に有之、成效不成效など申す資格は更らに無之候。吁々道德行爲が出來るものと自惚れ候事の、何としても御恥かしき次第に候。

先生

生が先生に厚く〳〵感謝の禮を申述べ度きは、最初本多老女が持參せられたる一冊の貴著が、ソモ〳〵入信の首途となり、先生の御信仰より溢れたる熱誠なる誌上の敎示は、知らず〳〵生をして一歩一歩信に近からしめ賜ふ。畢竟如來の善巧方便、生が宿緣ありし爲めと申せ、實に生より申せば先生を、善知識と仰ぐ次第に候。眞の信仰の感化力は、僅か一片の紙上を通じて未信の徒を開發するものと存候。同じ月の廿五日(昨年十二月)我派連枝能淨院殿當村西圓寺へ御巡錫相成候節生が入信の事を傳聞被遊、親たしく面會したしとの御旨を傳へられ候。一宗崇高の法主、連枝、其御連枝が、何等宗門に盡くしたること無き此新らしき青道心に、右の特旨を賜ふ恐懼の次第ながら、身に餘る光榮と存じ、母に介抱せられて伺候仕り、御懇篤なる御詞を辱ふし、親たしく御敎化を蒙むり申候。其際前述入信の顚末申上げ候時、連枝には「近角師の說敎講話にても聽聞したること一二度は有りや」との御尋ねに、生は未だ一回も御目に掛りたることなく、全く未見の師なるも、著書及雜誌に依りて感化を受け、斯くの仕末と、申上げ候ときには、連枝にも餘程感興を起こされたるもの丶如く候ひし。連枝の御敎化と、生が從來更らに聞法をせず今讀書に依りて忽如信を得られ候事は、當地信徒の者をして餘程意外の感と、一種の刺戟を與へ、幾分の覺醒を來たし候事、法の爲め欣喜此事に候。偏に先生の賜物と彌陀の慈光益々大なるを覺え申候。

先生

精神作用の肉體に影響すること著るしき例は、生が入信次

第肺結核に特有と申すべき日晡熱は、だん〳〵に減少候て、病勢頓に良好に向ひ、冬期の經過を吾れも人も危ぶみ候ものが、永き寒氣の持續したる去冬を、無事に經過したる事に候。生が肺患は喀血性とも申すべきか、發病以來今日迄。實に十數回の喀血致たし候。滾々と鮮血を喀するのときは、自分が醫師ながらも誠に心細き感を生じ、死の恐怖を徳ばしめ候。此時此際先生が誌上に說かれたる前念命終後念即生、の記憶は忽如と生じ、攝取不捨の此身なりと省み候ときは、心も靜平となり、喀血も自然に止み申候。頃日「清澤全集」を讀み、書中「喀血したる肺病人に與ふる書」を見、誠に同狀態、同感情と感じ申候。

入信の當初は煩惱一本願の信知の時間的距離未だ長き差あり候へども、信心の修養と申候て語弊かなれども、だん〳〵此時間的距離短かく相成り、煩惱生ずるのとき即時本願の信知の念生じ候。此等より推して未だ〳〵生は信の修養足らざる者と慚愧罷在候。

生が入信は早晩家族の者共をして、生と同じく如來の御手に接するのとき可有之、是れぞ大なる遺產と確信仕候。既に從來聞法の心餘まり無かりし生が母は、生が入信以來聞法の念頓に生じ候事、其第一徵と存候。彌陀の慈光普遍の思召を只だ〳〵不思議〳〵と報謝念佛の外無之候。

先生

今世にては所詮先生に見ゆるの期も無之と存じ候へども、當地には從來より佛敎壯年會なるもの設置され、時々名士招聘の組織に相成り居り候事故、何れは先生の勞を煩はすべき時節も有之べく、其際は生が法緣を御記憶に遺こされ、當地信徒の開發あらん事切に希望に堪えず候。當村は數年前初回の內務省撰奬の際模範村の名譽ある地に候。サレド〳〵信念と申す事に就ては、未だ〳〵及ばざること遠き狀態に候。

俗事に關するの書狀などに筆取り候ときは、直に疲勞を感じ候へども、今此長文を認め終り候ても、左程疲勞も、病體にも影響申さず、是れも精神作用の然らしむる所乎。如來の加護に依る乎。南無阿彌陀佛。

時盛夏に向ひ候折柄、法の爲め

謹んで先生の御健康を祈り申候。頓首再拜

夏季傳道日劃（ママ）（一）

近角は夏季求道會後、七月十七日夜を以て來夏傳道の途に上り、左記日割りにて、高松、別府、山口を濟まし。目下近畿地方に滯在中である。而して來月十三日には相違なく歸京の筈である。

七月十七日夜　出立
同　十八日　京都
同　十九日　高松着
同廿日より廿四日迄　高松夏季講習會
同　廿五日　船中
同　廿六日より三十日迄　別府佛敎講習會
同　卅日　道中

恩德廣大不思議なり

謹啓

甚暑の砌り益々御健勝の段奉大賀候。陳ば過日山口縣美禰郡共和村に於ける佛敎講習會の節は、非常なる御厄介に相成深く御禮申上候。回顧すれば多年家庭に於て信仰上の薰陶に預りしにも拘はらず、疑情の障碍に妨げられ自分免許の安心に滿足し、煩悶絕えざりし處、此度先生の御化導により、始めて大悲の御恩德廣大無邊にして、識量以外實に不可思議なることを御聞かせに相成り、多年の迷霧全く消散して、光風霽月とは此頃の私の胸中をば形容するものならんと有難く奉存候。從來兎角夜中物案じ多く、不眠の事も多かりしが、此頃は丸で變りて心地良く眠られ、物案じ少く相成候事、偏に心多歡喜觸光柔軟の御利益の結果と喜び居候。

乍去日夜家事に心を勞し候爲め、煩惱の起ること絕えず、たとえ家事無きも煩惱具足の凡夫、日夜一舉手一投足一念一聲の言動、悉く罪惡なることを感得すれば、御本願の尊さます〳〵仰ぎ知られて、御慈悲を喜ばせて貰ひます。村の人は私を誠に感心な善人とほめます。私は之を聞て慢心が起りまして。之も慢心だ、起してはならぬと抑へます。抑へるからえらいと思ひます。抑へるには及ばぬと思ひます。又兎角自分が御信心を戴いて居ると云ふ心が高ぶり、人の御信心を得ぬことを嘲ける樣な心も起ります。誠に仕方の無い淺間しきものです。大悲の親樣はさぞ御氣が痛むことであらうと思ひます。

別紙其當時の事を後日に日誌に認めたる摘要相認め置き候條御笑覽被下度く。先は御願迄如斯候草々。

大正二年八月十六日、農家の青者盆踊りの太鼓打つ音を聞きつゝ佛陀の御慈悲を思ひ浮べ乍ら認む

愚弟林　和輔百拜

日誌の一節（八月七日記す）

○八月一日（金）晴

本日より共和村字嘉萬に於ける講習會始まる。講師は文學士近角常觀氏なり。始め余の此會に參列せる目的は、單に名士の講話を聞き、珍らしき事を聞て得る所あらんと云ふ位の淺墓なる考にて赴きたるに、豫想外にして余の一驚を起したるは、講師近角先生の熱心にして、（中略）或者は自己の罪惡に泣き、或者は我安心の得られざることを歎き、或者は我煩悶の離解せざることを嘆き、或者は我安心の誤りなりしことに驚き、或者は我生死の大事に恐怖す。甚しきは半狂亂の體なるものあり。失神の狀態にあるものあり。先生の行く先きを追ひ〳〵て數箇所に及ぶものさへありと云ふ。實況を見聞して吾人不眞面目の徒も、知らず〳〵周圍の景況に卷き込まれ、熱心なる講聽者と化し畢りしこそ不思議なれ。

本日よりの講話は親鸞上人の御作「愚禿鈔」の講義なり。而して本日は「內愚外賢」と云ふ講題にて御話しあり。時移るに從ひ先生の信仰實驗談ありて態く聽聞するに、不思議にも我心中を透視して、我身の上のことを知て話さるゝの感あり。更

に談進んで「俗諦門の實行出來ざることを煩悶しつゝあるものは、未だ眞實信心を得たるものにあらず」の御一言は、如何に私を驚かしめしよ。靑天の霹靂とや云はん、頭上の大鐵槌とや云はん。實に余は年來人倫道德の上より論ずる「至誠」を理想として行動し、常に其實行意の如くならざることを煩悶しつゝありたればなり。實に余は從來安心決定せりと自信し人にも敎化し、人も亦之を認めありたればなり。嗚呼恐ろしい哉。然れども余が安心は金剛堅固ならざりき。何となれば近角先生の一喝の下に打破せられたればなり。若し金剛なれば何人か之を破毀し得べけんや。重て云ふ其當時の余の驚きと恐怖は何物を以て之を譬へんも得べからず。余が信仰は幼少より三十餘年間、父が熱心倦まざる薫陶の許に築かれ、加之明治四十四年十二月腸窒扶斯に罹り、同月十三日夜愈々危篤に陷り死の宣告を受け、自らも臨終近けりと觀念し、死の到達を待ちつゝありし斷末魔、極促の頂點迄實驗して鍛ひ上げたる安心なりしなり。之を金剛堅固と云ふも誰か疑ふものあらんや。然れども今日より追回するに、之れ全く我自ら造りたる安心なりき。「もー駄目だ、阿彌陀樣に任せい」と云ふ計りにて、「阿彌陀樣を我身の捨て所」となしたる迄の安心なりき。思へば危ふく恐ろしく身の毛も逆立つ計りなり。此危篤の境を不思議に助けられ、病氣本復後に於ける我精神界の狀態を考ふるに全く『嘆異鈔』の御文中の

口には願力を頼み奉ると云ひて、心には左こそ惡人を助けんと云ふ願不思議に在ますと云ふとも、さすがよからんものをこそ助け給はんずれと思ふ程に、願力を疑ひ他力を頼み參らする心缺けて、邊地の生を受けんこと最も歎き思ひ玉ふべきことなり。

と云ふ御示しと少しも變らず。然れども其當時余は之に氣付かざりし、否氣付かせて貰はざりしことは、誠に疑情の障り大なることの人に勝れたると、善知識に遇はざりしが故なり、嗚呼此疑情は最早自力にて取り去ること能はざりしなり。

和讃に曰く

善知識に遇ふことも、　敎ふることもまた難し、
良く聞くことも難ければ、　信ずることもなほ難し。
眞の知識にあふことは、　難きがなかになほ難し、
流轉輪廻のきはなきは、　疑情の障りにしくぞなき。

本日夜夕食後、先生の宿舍阿武氏宅に赴き、我信仰の瓦解せることを先生の膝下に告白し、其敎を乞ふ。其當時の余が心中の苦痛筆紙の能く盡す所にあらず。泣號低首恰かも暗中に燈火を求め、大砂原に人影を探すが如し。先生溫顏を以て迫らず急がず諄々として誤謬の點を指摘し玉ふ。言々肺肝に徹し涕涙衣を濕ふす。余も安心したる積りにて歸宿せり。又先生にも安心せし旨を述べて感謝の意を表せり。嗚呼然れども余が疑情の障碍、余が煩惱の强盛は如何に人に超越せしものか、一旦は死の開門に迫り、又本夜煩惱の域に達し、尙ほ先生の懇切なる御敎訓に預り乍ら、何となく言ふに言はれざる微細の不安あり。胸中夜の明けざる思ひありしは淺間しとも淺間し。

和讃に曰く

一代諸敎の信よりも、　弘願の信樂なを難し、

難中至難と說き玉ひ、　無過至難とのべ玉ふ。

實に私の心中を述べ玉ひしものならん、恐懼極りなし。

○八月二日　（土）　晴

本日は實に余が死生の一大事なり。若し此度聞き取り得ずんば最早萬劫にも出離解脫の機なしと思へば、食も味なく人言耳に徹せず。顏色憔悴精神沈鬱恰かも病者の如し。午前の講話「撰擇本願」に付ての御話なり。一言一句も聞き洩さじと力めたり。然れども未だ微細寸毫の不安の念我胸中に影を止めたり。此不安の念は最も極小にして、其當時にても在りとも言ふべく無しとも言ふべく、先生にも語る能はざりしなり。本夜疑惑の儘入寢す、熟睡することを得ず。

○八月三日　（日）　晴　曇相半ばす

午前八時より講話前日の如し。本日の講話は「圓頓入信」に就ての御話しなり。言々我腦裡に徹し、誠に有難し。

午後二時より妙覺寺にて先生の說敎あり。嗚呼此說敎の一座こそは、實に余が爲めには靈山法華の會座にも勝りて、有難きものなりき。此御說敎の內に、余が如き、特に疑情の障り多かりし人の、先生の御敎化にて入信したる實例を話されたり。此實例は其人（人の名も所も失念せり）先生の御敎化を受けしより五年に及ぶも、未だ決定の安心を得ず。五年目に先生に遇ひし時、先生問て曰く「如何です、御慈悲が戴かれましたか。」某曰く「もう私も色々考へ色々聞きましたが、どうしてもこうしても、もう駄目です。」先生曰く「そこです。」あなたの力でどれ程安心しようとしても、あなたの心で安心するの期は無かるべし。あなたが幾ら考へても駄目である、聞ても駄目である。其駄目な所に氣が付きましたか、佛は十劫の昔よりあなたの其駄目な所を御見越になつて、助け救はんとの本願を立て遊ばしてありますが、あなたは分りませぬか。」此御敎化にて某全く安心決定せりと云々……嗚呼此御一言、此一刹那、此一瞬時、此極促に多年わだかまりし滓とき胸中の薄紙ボロリト落脫せるの心起りしとき、何となく光風霽月の感あり。一道の光明赫灼として、絕對界より我頭上に直射するの思ひあり。歡喜胸に滿ち慚愧念頭に溢る。或は之をしも世人名けて信心決心とや名くらん。有難し尊し。

夫れ然り。然れども煩惱具足の心中に思ひ浮べたる追想のみ。事實の眞想は安養界に到りて食後の卓邊を賑はす話柄とならんのみ。……呵々。南無阿彌陀佛。

八月四日　（月）　晴

本日は心中のわだかまり全く除去し、一點の煩悶なく、心氣爽快春海の如く觀花の如し。以下略す。

信後述懷

慈母爲レ我泣
豚兒不レ知レ久
會遇善知識
始覺大悲心
仰見同情淚
聞得西岸聲

不レ思浄土樂
不レ恐地獄ノ苦
慚愧滿二念頭一
歡喜溢二胸腔一
更二憑ニ佛力一臨二人生一
粉骨碎身盡二報恩一
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛

夏季求道會日割（二）

八月一日より五日迄　〔山口縣美禰郡共和村 佛教講習會〕
同　七日より十三日迄　京都滯在
同　十四日より十六日迄　江州郷里
同　十七日　神戸
同　十九日　江州堅田光德寺
同　二十日　大津大谷派別院
同　二十一日より二十三日迄　江州草津町傳久寺

十年の聞法さては皆な虚戯に屬せし乎

澁谷淳藏

吾人祖先より已來眞宗大谷派本願寺の門末に流れを汲み、代々宗風を遵守し、于今至るまで相續せり。吾人中年頃より、官界に身を投じてより、爾來漸々如來樣と疎遠に打過ぎ、去る明治三十六年までは、定例の佛事法要のみ家庭の習慣により懈怠なく執行せしも、敢て佛を尊重するの念なし。

然る處同年十一月拙家の柱礎たる長男戸主、（家督讓り渡濟）當年二十九才を一期として死去致せしにより、心に悲歎止むことなく、憂愁は更に離去せず、世の無常をはかなみ、深く常住ならざることを感じて、たゞ茫朦として何事も娛しまず、彼是思惑中、不圖右に反し自身若し此境遇に接しなば如何。家庭の處置は殘存者にて處理せらるべきも、自身の未來到着地は何國なるや、暗中の闇にして更に目的なし、戰慄一番先づ靈魂の到達地點が先決問題なりと心付き、直ちに次男をして家督を嗣がしめ、常々拜讀せし『御文』一帖目十一通

まことに死せんときは、かねてたのみをきつる妻子も、財寶も、わが身には一つもあひそふことあるべからず。されば死出の山路のすゑ、三途の大河をばたゞひとりこそゆきなんずれ、これによりてたゞふかくねがふべきは後生なり、又たのむべきは彌陀如來なり、信心決定してまゐるべきは安養の淨土なり。

と仰せあるにより、夫より寺院へ參詣を始めたれども、東京住居は未だ日淺く、知己法友とて更に無之、何んとなく他人に恥敷く思ひ、隣席の衆中にもおかしく思はれんずるやと心得、きまりあしく、場隅に坐して說敎を聽聞すれども、御法りの意味更に領解難出來、聊か躊躇心を起したれども、尙ほ勤めて日子を重ぬるに隨ひ、少々づゝ解り始まり、又曩に他人並隣席の衆中に恥敷く、思ひたる心も、最初暫時にして、遂には高座近くまで進み寄り聽聞することを得たり。

然る處三十七年八月に至り、實父當年八十五才を一期として老衰病にて死亡せり。彌々無常の迅速なるに感動して、專思聞法に從事せしかども、兎角不得要領勝に終るのみ。故に傍ら求道の捷徑もあらんと、雜誌の講讀を始め、求道上餘念なきに、亦復無常の敎風襲來し、四十一年二月に至り、愛孫女子當年滿壹才壹ヶ月を一期として死亡せしめ、如何なる緣にや品川町正德寺平松理英師の厄介となり、之れが御緣となり、同師の敎化を受け、時に聞法に接し、亦或る時市中散步中九段に至りたるに、近角常觀師講演求道會の掲示あるを認め、直ちに入場聽聞の處、大に心中を鑒たれ、反省すること多し。故に同師を信賴するの念久し。加ふるに書見も又必要と心得、南條博士監修の親鸞聖人全書蓮如上人全書又は秀存香月院香樹院香山院語錄禿義峯師の安心小話等を講讀し、此等の書籍に依り大に眞宗大體の法道を領解するを得たり。

偖て說敎聽聞に從事せし中にも、最初にたのむものをたすけるとの仰せに對し、たのむばかりの御助けと振向くばかりにて往生は定まるとの敎へを聽聞すれども、この賴み心には殆んど迷惑致し、機の方より佛助け給へと出かければ、其心自力ぢやと承り、又『御文』三帖目壹通の中には

此佛をばなんとたのみ、なんとこゝろをもちてか助け給ふべきぞといふに、それわがみのつみのふかきことをばうちをきて、たゞかの阿彌陀佛を二こゝろなく一向にたのみまゐらせて、一念も疑ふ心なくば必ず助け給ふべし。

とありて、初心の吾人は賴み憑るべき手順更に領解難出來、或時布敎師に對かひて、前陳不了解の旨を以て質問に及び、且南無阿彌陀佛と云ふは衆生の賴み心も含有してあるにあらずや、然るに尙ほ助け給へとたのむは重複にはあらざらんやと。布敎師の曰く、南無阿彌陀佛は機法一體に、法藏因位のとき名號六字を御成就被遊たる御言葉なれば、衆生の方よりは阿彌陀佛に對かひ奉りて後生御助け候へとたのまねばならんと敎へられ候。然れども此敎へにも心服は出來ず、故に『御文』に據りて判明するやもしれずと心得、取調べたるに四帖目通三末文に

彌陀の名をきゝうることのあるならば南無阿彌陀佛とたのめみなとひ

と御作詠あり、又『正像末和讃』末尾に編綴ある自然法爾御示敎の中に

彌陀佛の御誓ひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひてむかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを、自然とはまふすぞとき〻て候。

とあり、亦『歎異鈔』第二章中

親鸞にをきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

とあり、亦法然上人の『一枚起章文』にも

（前略）たゞ南无阿彌陀佛と申して疑ひなく往生するぞと思ひとりて申す外に、別の子細さふらはず。

とあり、亦『帖外御文』卷一壹通目

（前略）たとひ名號をとなふるとも、佛たすけたまへとはおもふべからず、たゞ彌陀をたのむこゝろの一念の信心にまりて、やすく御助けあることのかたじけなさのあまり、彌陀如來の御助けありたる御恩を報じたてまつる念佛なりと心得べきなり。

とあります。如斯蓮如上人の仰せ言を聽聞すれば、衆生の方より敢て助けたまへとたのまざれども、南无阿彌陀佛の一行にて往生は差間無之ものと思慮すれども、斯くては亦復符節合せざる廉あり。『御文』三帖目三通

たゞこゝにいだして念佛ばかりをとなふるひとはおほやうなり、それは極樂には往生せず。この念佛のいはれをよくしりたるひとこそほとけにはなるべけれ、なにのやうもなく彌陀をよく信ずるこゝろだにもひとつにさだまれば、やすく淨土へはまいるべきなり。

とあり、又『同』二通の中

世間に沙汰するところの念佛といふは、たゞくちにだにも南无阿彌陀佛ととなふれば、たすかるやうにみなひとのおもへり。それはおほつかなきことなり。さりながら淨土一家にをいて、さやうに沙汰する方もあり、是非すへからず。

とあります。如上の御文面に首を突込み、たのむものを助けるの御勅命の思召氷解する能はず、不得要領にして不審の儘聽聞を重ね來り候。

然る處『御文』三帖目初通の中に

彌陀如來と申すは、かゝる我らごときのあさましき女人のためにをこし給へる本願なれば、まことに佛智の不思議と信じて、我身はわろきいたづらものなりと思ひつめて、ふかく如來に歸入する心をもつべし。さてこの信ずる心も、念ずる心も彌陀如來の御方便よりをこさしむるものなり。

此御文により不圖如來より先手の御呼掛けと云ふことを氣付、熟考すれば、阿彌陀佛よりはたのむものを助けると仰せあるは南无阿彌陀佛なり、衆生の方は其御言ばの下にたのむばかりの御助けとは、うれしやありがたやの思ひ、後生御助け候へとたのむばかりは、阿彌陀佛に南无し奉る事にてあり。されば念佛一行にて往生は成辨すること明らかに領解は致したれども、信心と念佛の關係に就て不了解の廉ありたるに、『末燈鈔』の中に

信の一念行の一念ふたつなれども、信にはなれたる行もなし。行の一念をはなれたる信の一念もなし。そのゆへは行と申すは、本願の名號を一聲となへて、往生すと申すことをきゝて、ひとこゝろをもとなへ、もしは十念をもせんは行なり。この御誓ひをきゝて、うたがふこゝろのすこしもなきを信の一念とまふすなり。信と行と二つときけども、行をひとこゝろするぞときゝてうたがはねば、行をはなれたる信

はなしときゝて候。また信をはなれたる行なしとおぼしめすべし。これみな彌陀の御誓ひと申ことをこゝろふべし。行と信とは御誓ひを申すなり。穴賢々々。

此御言葉を聞きて實にもと思ひ、前顯の疑惑は皆々消散せり。

次に疑義を生じたるは、御信心の意味に就てなり。最初御信心なるものは佛の方より御廻向の樣に聽聞せしに『信の卷』に二種深心を御示しあるに、其文に曰く

一には決定してふかく自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに沒しつねに流轉して、出離の緣あることなしと信ず。二には決定して、ふかく阿彌陀佛の四十八願は、衆生を攝受してうたがひなくおもんぱかりなければ、かの願力に乘じてさだめて往生を得と信ず。

とあり、此御文面を拜讀すれば、無論凡夫の方より發起したる信念と思考せらる。又能登國の屯城師も、この二種深心の義に付見解を誤り、異安心の名を得られたる由、然れども麤て見れば、素より凡夫の妄心により深心するも、虛假不實にして眞實の心あることなし。何んとなれば御教化上臨終取詰めて思案せよと御示しあり。吾人も再々取詰め深心出來得るかと云ふに、平素說教聽聞の上より、我が身の罪業深重なることは承知して、之れを疑ふことはなけれども、彌々墮獄までに取詰めること能はず。其所以は阿彌陀佛の衆生を攝受なさるゝを知得するが故に、願力に乘じて定めて往生をすることと信ずるのみと早や合點したるまでにして、實に墨の上の水練に異ならず、故に尙ほ心を取直し再應熟考するに、佛道修行せんには、諸惡莫作修善奉行と廢惡修善の道理は必然と心に鞭撻を加へ考慮すれども、我が機は惡を慎まんとすれども慎しむ能はず、亦善を修せんと欲へども之れを行ふ能はず、惡業煩惱は數々襲來すること間斷なし。身口意の三業各異にして、一致すること能はず。此ゆゑに出離の緣更になく、彌々墮獄より他に道なしと決定はしたるものゝ、此者を落さんと云ふ御本願ぢやとは確に佛を勝手に引出すものと思へ、全く未だ佛の御慈悲に接觸する能はざるものなり。然し心はたゞ淨土へは行くつもり、地獄には落ちぬつもりの計畫のみ。誠に淺間敷執心にあらずや、はづべしかなしむべきことであります。

如此知り分け聞分け分別によりて理窟を並べたれども、自身の安心立命に至りては據るべきものなし。爰に蓮如上人は『御文』五帖目十三通

それ南无阿彌陀佛と申す文字は、そのかずわづかに六字なれば、さのみ功能のあるべきともおぼえざるに、此の六字の名號のうちには、无上甚深の功德利益の廣大なること、更にそのきはまりなきものなり。されば信心をうるといふも、この六字の內にこもれりとしるべし。さらに別に信心とて、六字の外にはあるべからざるものなり。

と御教示あれども、何時も其事と思ひて耳へもしか〳〵ともいらず。或時『安心小活』発義集編を講讀中、左の御言ばあり深く心に感動したり。

一蓮院講師の曰く、仰せだけて安心せよ、仰せを聞てそれを我が機へもどして安心せやうといふのは、深く彌陀を賴んだのでない。仰せだけて安心して仕舞うのが、深く彌陀を

たのんだのぢや。

同く香樹院講師の『手記錄』に曰く

六字の謂をきくとは、御助けの法のまゝを聞くこと、其御助けをきくまゝをたのむとは云ふ、きくまゝを聞くにあらず、まゝの沙汰までもいらぬことをきくなり。おきかせの聽聞の法に、よくきく能歸の機までも成就してあるゆゑに、聞くまゝを信心と云ふなり。

亦曰く

聞くと雖も、聲と云ふは心の使ゆゑに、聲にはなれ言につかず、聽聞にわかれ、彌陀のこゝろを知る一つ、知る一つを知るにあらず、知れた心に目をかけず、信心の功をみず、所信の法功を知る一つ。

噫永々聽聞を重ね來れども、得るものとては一つもなし。唯彌陀佛の御はたらきのみでありしか、聞け〳〵とは此意味を聞くことでありました乎とあきれ果てゝ、今日まで彌陀佛の御本願を信ぜよ聞けよと度々聽聞しながら、何時か主觀たる御本願を飛超え、先にはもつとちかみちもあらんと探り居たるこゝろのにくさ加減、實に恥ち入り申候。今日は月影をも宿せし心地で、彌陀の御呼聲一つがたより、力らとなりたることのうれしや〳〵の思ひにて、日子を經過せし處、或る日一つの難題は起れり。

事件は僅々なれども、對主の言や甚だ痼癖に障り、夫より煩悶に〳〵を重ね、瞋悲に〳〵を重ね、逆麟頂上に達するや、庭園の樹木四周の家屋墻壁等も見れども更に識別する能はず、茫々たる原野と化したるが如し。此時身はおのゝき、心は冷寒を覺え、若しいま命ち終らば此儘地獄道へ墮落するの外なしと、大に怯怖心を懷き、思はず高聲に念佛を唱へたれども、妄雲は退却せず。又此落るものを墮さんと誓はせられたる御本願ぢや、又此儘の御助けぢやと、心を制すれども、更に安意は生せず。亦世間法は無明なるが故に、無體即空有用成事なんと、口には言へどもたゞ唱揚するのみ。心は前の如く、煩悶と瞋悲は少しも減退せず。怯怖心は增々募り、精神は顚倒し、防禦の術を失し、是れは早速高師を尋ねて篤と敎化を受けざれば安心難出來と、我れと我が心を鎭め、同時に此煩悶の發りたる原因に付て探窮すれば、對主の意を押し曲げて我が意を主張せんと欲ふにあり。我慢するは此時なり、寧ろ對主の意に任すべしと退讓心を懷きたれば、今までの瞋悲も煩悶も何の間にか消散し、暗雲は影げだにも認めず、漸く安意に還へりたるは可なりと雖ども、偖て不審なるは即今まで往生は大丈夫と思ひ來りたる保持の信仰心は何者にやあらん。たゞ聞き覺えたる法語を舌端に掛け吐き出し居たるまでにやあらん。些しも慰安の念を生ぜざるは信仰心の薄弱故ならん。我、無事平穩のときは此儘の御助けぢや、墮るものを御救ひ下さるとか、御慈悲が聞へたとか思ひ居たること、さては皆虛戲に屬する乎。皆知り分け聞き分けたる分際ならん乎。篤と我が身を顧るに、平素佛は我々を照し詰め見通し詰め、亦はこいよ來れと御招き詰めと聽聞しながら、得手に任せ惡人正客ぢやの、我が惡業は御見通し詰めぢやのと、盲ら佛同樣に我が儘勝手の理窟を付け、些しも佛に對し尊重心も恐懼心もなく、亦憚る事もせずして窮極に迫りたるとき、御佛の來現を

仰ぎたればとて、御出現在します筈なしと慚愧に不堪恐入り、縮み入り、全く彌陀佛の眞實なる御慈悲を知得せざるが故と、心底より懺悔すると同時に『正信偈』の御文、煩惱障眼雖不見大悲無倦常照我の一句念頭に浮かみ、此常照我の御親切を忘却し居たる御恩知らずと恭敬心を發したれば、何時の間にか內佛の御姿が親しくなり、拜禮每に吾人を御救ひ下さる御姿と思へ、其都度間違はさんぞこいよ〳〵と御呼び掛け下さるゝ樣に思へ、實に佛陀の御慈悲深きことが心に徹到し、嘆賞の笑味は含まざるを得ず。亦他用に紛れ暮すときも、緣に隨ひ同樣心に浮べさせられ、誠に親しく思ふ餘り、省吾すれば斯も敬慕の念を生ずるは之れ命終に近づきたるにあらずやと、彌々恭敬の念は增上するのみ。宿緣は何に因りて發起するや、前陳の煩悶なかりせば如此恭喜に接する能はず、是皆彌陀如來の慈悲を以て御慈悲を知らしめ給ひたること、悅び、而して斯の尊敬心を懷くと俱に、兎角世間が獨り狹隘に思へ、諸法に縛されて自然窮屈を感ぜらる。其所以は煩惱妄念妄執は元より異ならざれども、以前は惡口を云ふても御見通しぢや、惡業を働きても此儘の御助けぢやと、放逸に流れ暮したれども、今や佛の御冥慮に恥入り、聊かたりとも之れを愼しむの念を生ず。然れども惡性の凡愚到底全部押し止め得るものに非ざれば、出來得る限り心口各異は一致を望み、身は言行一致を主として之れを愼みたし、其餘の有用成事は其時の緣に任せて發りたるとき、ひたすらすみません〳〵と念々稱名常懺悔で誤るの外はありませんと納得させて頂きました。然れども此窮屈の區域を何んとか脫出せん方法もあらんと、再び勇進奮起せしかど、到底妄心の吾人にして力に及ぶべきことにあらざるを悟り、自然に任すが得策と思ひ、亦過去未來は兎も角、現在に此無上の御法りを聽かせて頂き、我が機の惡性又は機の不確實を知らざれ、過去の業緣により今世の身の上分限は勿論足ることまでも知らしめられ、現に只今此仕合の身に育てられつゝある大悲無倦常照我と仰ぎ奉つれば、窮屈も何にもあるものでなし。唯々佛恩の廣大無碍なるを感謝々々の思ひより、御恩の稱名相續が肝要と存ぜられ、吾人は最早光明攝取の中に安住せしめられ、苦境より放逐せられたるやの心地にて、何んとなく佛恩の深遠なることが心に浮かむ每に、低頭禮拜と俱に御稱名は湧出いたします。

斯く表白仕候中にも、矛盾又は錯誤の廉は難免存候。亡命の關門は容易ならざる一大事の義に付、篤く御敎訓を奉仰候。敬具。

夏季傳道日割（三）

八月廿四、五日	堺市神明町眞宗寺
同　廿六日より三十日迄	大阪難波別院
同　卅一日	攝津茨木別院
九月一日より十日迄	江州鄕里
同　十一、二日	美　濃
同　十三日	歸京第二求道會

私一人のための御苦勞

堤　みゆき

前號雜錄欄に在る如く、福岡なる吉田氏の土曜會の御緣により、熊本縣下人吉、多良木兩地に於ける堤家一族の入信法悅の狀は實に末代の不思議である。今左に載するは、最近多良木町なる堤重藏氏夫人が入信當時吉田氏に寄せられたる書面であります。

南無阿彌陀佛〳〵〳〵。誠に〳〵不思議〳〵と申す外に御座いません。私は元來佛樣と云ふ思ひは少しも有りませず、佛樣の御前にて拜みますことさへをかしく思ふてゐましたこの私、昨年良人が先生樣の御宅に參上いたしまして、御世話樣にあづかりてをりました時、御禮狀さし上げましたのが御緣となり、御先生樣より私に對し、信仰は如何ですかとの御尋ねにあづかりまして、何とやら御返事さし上げずに置かれませんやうな心地になりまして、直に私の心中を御話いたしましたら、又々先生樣より有りがたい御手紙度々と頂きましたが、一向〳〵何の事やらさつぱり分りませず、良人の妹などはその御手紙を大變有りがたい〳〵と申されますので、如何いたしましたらそんなに有りがたくなる事かと思ふてはをりましたものゝ、どうもありませず平氣でをりましたが、良人は御先生樣の御かげ樣にて、非常に〳〵よろこんで歸りましたが、私はやはりどうとも有りませんでした。それに良人が私にしきりと色々と御話をしてくれましても、笑ひ半分にしてをりました處に、昨年七月御先生樣の人吉に御出で下さる事になりましたので、それでは私も聞いて見ませうかと思ふて人吉に參りました。其の時良人がしつかり聞かねばならぬぞよと申しますので、私も折角聞きに參りました事故、はまつて聞きますよと申しまして、朝から夕まで聞いたつもりで御座いますけれども、さつぱり〳〵分りませず、いつも〳〵御先生樣につまらぬ事のみ御尋ねいたしてをりましたが、私としてはつまらぬ事とも思ひませず、一心に聞いてをりましたつもりで御座いましたが、多良木の方に御先生樣の御出てを頂きました時、御先生樣より私に不眞地目だとの仰せに、私はちと感情あしく思ひまして、かなしくて〳〵たまりませんでした。然し御先生樣の御話は、やはり〳〵聞きたくて〳〵たまりませんので、御承知の通り泣く〳〵ながら聞いてをりましたがいくら聞いても〳〵分りませず、一入〳〵かなしくてたまりませんでした。つい〳〵分らぬ〳〵の一點ばりにて、御先生樣と御別れいたします事とはなりましたが、御先生樣の御出立後は、良人に話をしてもらひたいと思ふてをりました處にある日良人が申しますのに、お前はまだ〳〵遠い〳〵と申しまして、どうも〳〵お前は聞く氣がないから話されんと申しました故、あゝ自分はこれ程まで聞きたいのに、あんな事を云ふて下さる、あゝ情けない夫じやと、心にいやな感じがいたしました。それに又母上樣が、どうもみゆきはかろ〳〵しき事のみ御先生樣に御尋ねいたし、勿體ないと、申されましたと云ふ事を聞きまして、また私はいやな感じを起し、あゝ自分はそんなにかろ〳〵しき事は御尋ねはしてをらんのに何うしてそんな事云ふて下さる事かと、心にこう思ひました。又主人の妹が、姉さんにはどうも話しがされんと申されましたと聞きまして、又々いやな思ひを起し、あゝ私はなぜ皆さんからこんなに云はれるてあろうか、私が信心が頂けぬから嫌つて憎くんで下さるのぢやと思ひまして、悲くて〳〵たまらずなりまして、良人の前にてついこんな事を申しました。

「あゝなぜに私はこんは佛法家に參りましたてせう、私が信心

を頂かればよかろうけれども、もしや一生頂けんとすれば、一生皆々樣から嫌はれる事であらう、あゝこんなに苦しい事なら御信心の御話など聞かねば却てよかつたのに」と申しましたので、良人は私がこの言葉を聞き、涙をほろ〳〵と流しまして、「勿體ない事をいふてくれる、お前は實に〳〵邪見な心をもつてゐる奴ぢやあゝ勿體ない〳〵」とさめ〴〵と泣き出しました。丁度其の時、八代の妹もをりまして、ほんに姉樣は心得ちがひて御座います、どうかこらえて下さいと、良人に詫び入つてくれました。けれども、私はたゞ〳〵皆樣から憎まれてゐると思ひこみ、悲しくて〳〵たまりませんでした。

妹は其の後、熱心に良人に御話を聞かせて頂いてをりますので、良人も吾が身を忘れて、御話をしてをりましたので、私は聞かずに居らうかと思ふて見ても、聞きたくてたまりません。然しどうやら私には良人が話してくれませんやうな心地がいたしまして、腹が立つて〳〵たまりません。それでもやはり〳〵聞きたいものですから、そろ〳〵聞きに參りますと、なほ私はさつぱりわかりませず、色々尋ねますれば、いつも良人がお前が頭が高いとか、善人では頂けぬとか申しますので、私はそんなに善人にはなつてをりませんのに、話をして聞かすまいと思ふて、さう云ふて下さるのでせうなど云ふて、又腹を立てますので、良人もとても自分ではいけんと思ひましたのでせう。私が二階に上つて悲しんでゐました時に、妹と二人話し合ふて、本店の兄をよんで、話をしてもらつたらよいかもしれんからとて、電報にてたゞ兄に一寸きて呉れと云ふてやりましたさうでしたが、直に兄が參りました、何の用事が有るのかとも尋ねませず、來ると直に兄弟にて御法話をいたして喜んでをりましたが、私は例の通り二階にて悲しんでをりました故、妹が御飲をあげる事にいたしまして、御話を聞いてをりましたが、其の兄のよろこぶ有樣が如何にも美はしく有りますのに、妹は實に不思議〳〵と思ひますと、兄の顏を見るなり何とも〳〵云はれず、泣きふしましたさうです。それから兄が私のそばに參りまして、どんな心地がするか、そんなに苦しまんでもよい、何も入らん、其の御前の苦しんでゐるその心中を可愛想ぢやと云ふて下さる御慈悲だからと、申してくれましたけれども、どうも有りません、やはり〳〵分りません。翌朝兄は人吉に歸られました。妹は大變うれしさうな顏をして、良人と二人互に御話をいたして喜びます故私は羨ましいやら、悲しいやらで、何だか良人が私を見すてゝ、妹にばかり親切をかけてゐるやうな氣もちになり、腹が立つて〳〵良人が申しまする事は、何でも不親切に思はれまして、こんな事ならもう〳〵死んでしまつたらと、幾度か〳〵思ひましたが、死ぬれば地獄に落ちねばならぬから、恐ろしいと思ひ、身のおき處もなきやうに、苦しく有りました。其の時私はこれ程まで良人をうらんでをりましたけれども、良人はにこ〳〵笑ふてをりますので、又々私が良人に對し、人の苦しむのを見て笑ふて下さるとは、餘り情のない人じやと云ふて、やかましく言ひましても、なほ〳〵笑ふてをりました。私はこの時一寸も私が惡いなど云ふことは思ひませず、たゞ〳〵良人ばかり恨んでをりました。然しいつまで〳〵こんな事思ふた處て、つまらん事だから、そろ〳〵聞きをつたら、いつか分る事が有ろうからと思ひかへて、時々人樣に御話いたしてをります時にのみ聞いてをりましたが、どうしても〳〵分りません。

御先生樣より度々の御手紙も頂きましたけれど、やはり分りませず、久留米から下さいました御手紙などは、實に御先生の御親切は有りがたう御座いますけれど、御慈悲がどうしても分りません。有りがたく有りません〳〵と申してをりま

した。そして其の後、有田先生と御先生樣との御來人に御緣にあはせて頂きまして、有田先生の御話を頂きまして、御慈悲が非常に有りがたく感じました。あゝこれまでの事何でも御慈悲で御座いましたかと思ひました。ほんに有りがたい〳〵と、よろこんでをりましたが、其の後どうやら人樣のやうにはよろこばれませんと、一人思ふてをりましたが、或時良人が一寸した事を申しましたら、私が腹を立てましたので、良人がお前の信仰はどうやら安心が出來ん、頂いて居るのならそんなにあるものではない、と申しましたので、一寸腹が立ちましたけれども、ほんにもしやまちがつてゐたら大變と思ひまして、私の思ひをのべました處が、それではお前のは違がつてをると申しましたので、あゝ私のは違つてをりましたと、思ひましたのが、丁度近角先生の福岡に御出で下さる一兩日前の事で御座いましたから、良人が申しますのに「よい時によくそこに氣がついた、この節はよく〳〵近角先生の御話を聞け」と云ふて呉れましたして、熊本までぜひ〳〵行つて御話を聞いて來いと云ふて呉れますので、私も嬉しく思ひ、しつかりはまつて聞きましたつもりで御座いましたけれど、やはり〳〵分りません。人吉でも相變らず分りませんので、實に〳〵吾が身ながら殘念に思ひました。近角先生樣の御出立後は、御先生樣が御なつかしく、近角先生樣の御親切を思ひ浮べまする度毎に、實に御先生樣の御なつかしく有りがたく感じさせて頂いてをりましたけれど、やはり〳〵眞實分りません。どうしても私は一念がないからいけません〳〵。一度は是非々々とそれのみ思ふて、日々仕事をするにも、思ひ出し〳〵いたしてをりましたが、この頃ちと良人が病氣のために、人吉果樹園に四五日間行つてをりましたので、私もちと心細い氣がいたしてをりました。

すると丁度六月廿八日の夜に、夢を見ました。それはこんな夢です。人吉の父上樣が、極樂から本店の隱居屋の座敷に來てすわつてをられました。そこに二三の信者と家族皆々集りまして、うれしく御話を致してをりますと、御父上樣が非常に喜ばれます有樣が、實に〳〵うれしさうで、其の御姿が生きてをられる時とちつとも變りません。其の時私は一人喜ばれませんので、大變父上樣にすまぬ心地がいたしまして、其のまゝ消えてしまひました。

翌日即ち廿九日の夜、林田氏宅にて御話が御座いますからとの御知らせを頂きましたが、良人も留守ですし、一寸家を出る事がと思ひましたけれど、何だか行き度くて〳〵たまりません、家の事は皆云ひつけて參りました。そして夜十二時頃にかへりまして、裏の方に行かねばならぬ用事が有りましたので、あかりもつけずに參りましたら、ちつとも〳〵先きが見えません。其の時私は感じました、あゝ今まで自分は何でも自分の眼の力にて、何でも見てゐると思ふてゐるが、そうではなかつた。實に自分は盲目である、誠に〳〵かたわで有ると思ひました。それから又自分は實につまらぬもので有る、自分の力と云ふものは一つもない、皆々他力をかりて初めてわかるので有ると思ひました。翌日良人も人吉より歸りました故、多くの求道者が御出で下されまして、夜二時頃まで聞かせて頂きました。其の後毎夜〳〵皆樣が御出で下さいますので實は私はいやがつてをりましたが、御出で下さるのを斷はるわけにもゆきませず、一夜二夜の事ならよいけれども、病氣中の事なれば、困つたものと思ひつゝ、共に聞かせて頂いてをりました處が、一夜私が思ひましたのには、畫見ればむかふの方には山も見える田畑も見えるが、夜になつたら何一つ見えん、併し自分の目は畫と同じくあいてゐるので有る。見れば見る程何一つとして見えませず、眞に暗黑で有りました。するとどうやらおそろしくなりまして、誠に〳〵

この世が眞にくらやみで有る、未來はなほしもの事、暗いばかりでない、地獄に落ちると思ふとおそろしく、あゝあの暗い處に光明が照らされたら、何もかも明らかに分るから、私も如來樣の御慈悲の光明にてらされたら、いよ〳〵吾が身の程が分るで有らう、されども自分は未だどうしても分らぬ、分らぬとすればいよ〳〵暗いと思ひました。今夜こそ眠らずに考へて見ようかと思ふて床につきましたけれども、いつの間にか眠つてしまひました。

それより二三日いたしまして、丁度七月四日の夜十一時頃に婦人が四人、男一人聞きに御出でになりましたと下女がよびますので、あゝおそくからこられては困る、然し致し方ないと私一人ぐづ〳〵云ふて人樣と共に聞かせて頂きまして、午前一時頃皆々歸られました。私も直に床につきましたが、どうしても〳〵眠られません。なぜこんなに眠られんのであらうかと、眠らんといたしてもどうしても眠られません、あまり眠りませんので、色々と考へて、つい世の中の事思ひましたら、實に〳〵世の中はあてにならぬ、なさけないと思ひました。又私はいつも夫を當てには思はぬ〳〵と口には申してをりますが、眞實やはり〳〵あてにしてをりました。それでいつまでも頂けぬ事であらうなど、色々と思ふて目をふさいでをりましたが、不思議にも目のあたりに幽靈の姿が見えまして、おそろしくて〳〵たまりません、その時をかしな失禮な事ですが、便所に參りましたらいよ〳〵幽靈の姿がそこらあたりに見ゆるやうな心地がいたしまして、身の毛もよだつやうにおそろしく、急いで床につきました。其の時は丁度午前四時になつてをりました。それより一寸うつら〳〵といたしました時に、何物かゞ私の横腹を二度ひどくおさへました。其の苦しさ何とも〳〵たとへられんやうに苦しく有りまして、何とか高聲でも發した氣がいたしました。其時良人が何を云ふかと申しますので、「あなたはなぜに私をそんなに苦しめなさるのです。」と云ふて、又眠りましたやうにありましたから、翌朝其の話をいたしましたが、良人はそんな事は知らんと申しまして、「何を云ふか」となどは云はぬと申しますので、よく〳〵考へて見ますれば、やはりそれが夢で有つたのかとも思はれ、又現在そんなに有つたやうにも有りまして、つい笑ひ話にてすみました。それが丁度七月五日の朝の事でした。それから翌日色々の仕事どもいたしてをります内に、一寸こんな事を思ひました。昨夜はどうも〳〵不思議で有りました、あんなおそろしい事を夢か現か分らんとは、實に〳〵不思議と思ひまして、又昨夜皆樣が御法話を聞きに來られた時には、いやな思ひがしましたが、實に私は思ひちがひをしてをりました。決して〳〵あの人々のために聞きに來られるのでなくして、全く私に聞かせんがための、御方便で有りましたかと思ひ浮べまして、實に昨夜來て下された人々に對し、いやな感じを起したのが、氣の毒に思ひまして、實に〳〵考へ違ひをしてをりましたと、一人詫てをりましたのです。すると同日午後四時頃、林田奥樣が御出で下されましたが、丁度良人が眠つてをりましたけれど、よびおこしまして、奥樣と二人話をきかせて貰ひませうと思ふてをりましたが、良人が一向話してくれませんでしたが、一寸立ちまして佛樣の處に行きまして、親鸞上人樣の御遺言書とか申しまして、紙一枚にかいて有るのをもつて參りまして、御信心はこれ一つじや、これが一番有りがたいと申しまして、それを讀んで聞かせてもらひました。

まめやかに念佛したまふこと、うれしくたふとく候。信ずるといふも心なり、うたがふといふも心なり、わが心にて往生せず、わが心さわりならず、信ぜさせ給ふは佛

智なり、疑はしきはわが迷心なり。このさま〳〵の心を助けんと誓ひ給ふ如來のおん心にて、やすく往生するぞと信ぜよとなり。此要を知らせんとて疑をのぞけと云ふなり。疑ありては往生せず、あやぶむ心、即ち疑にてあるものを、何事もさぞとはしきは凡夫の常なり。然るに佛は豫てしろしめして助けんと誓ひ給へるものを、機に滯らずうちはなれて、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛〳〵〳〵とたのみいるこそ、めで度く往生にて候なり。このことわりを誰々の人へもおん傳へ給ふべく候。あなかしこ〳〵。

其の御言葉が、一々私の身にしみ〴〵と有りがたう御座いまして、（圏點の附しある處にて殊に有難く感じました。）あゝ實に〳〵有りがたう御座います。それまでの御慈悲とは知らず今が今まで遣げ廻はつて居りました。あゝ實に勿體なう御座います、南無阿彌陀佛〳〵。これまで私は、誠に〳〵わが機をのみあせつてをりましてと、勿體なうて〳〵たまりませんでした。實に〳〵只今まで如來樣を遠い處にあがめてをりました。あゝ勿體ない〳〵、有りがたい〳〵と思ひましたら、嬉しいやら勿體ないやら有りだいやら、とても〳〵何ともたとへられませず、とんで踊り出したいやうにうれしく有りました。良人も非常によろこんでくれまして、なほそれから御話を聞かせてもらひましたが、それからといふものは、一々有りがたく聞えまして、皆々私一人のための如來樣の御苦勞で御座いましたと、頭をさげずにはをられません。南無阿彌陀佛〳〵。

あゝ思ひまはして見ますれば、昨年良人が御先生樣に御緣に合はせて頂きました事から以來、皆々私一人のための御方便で御座いました。私は實にそれとも知らず、夫を恨らみ、多くの人々樣をうらみまして、試に〳〵勿體なう御座います。實にどこ〳〵までも吾が身しらずのこの私、人なみはづれのこの淺間しい我儘なこの私を、よくも〳〵御見捨てなく御導き下され、何と〳〵御詫びの申上げやうも御座いませず、眞に頭が上げられません。かゝる〳〵淺間敷き私を、如來樣なればこそ御見捨てもなく、種々と御方便に預りまして、誠に〳〵勿體なう御座います。あゝ思へば如來樣に久しい間御苦勞を御かけ申しました。あゝ勿體ない〳〵。南無阿彌陀佛〳〵〳〵。實に不思議〳〵と申すより外に御座いません。昨年來御先生樣はじめ、有田先生近角先生の御來人、たゞ〳〵私一人のための御方便で御座いましたかと、たゞ〳〵御慈悲の廣大なる事を日々よろこばせて頂いてをりまする。かゝる御慈悲をかうぶりながら、いつまでも〳〵分りません〳〵とにげまはつてをりました事を思へば〳〵、實に私は淺間敷いもので御座います。實にわが身知らずの私で御座います。南無阿彌陀佛〳〵〳〵〳〵。

時報

第三回夏季求道會

本年も七月四日より十一日迄、豫定の如く求道學舍の第三回夏季求道會を開催した。例年の如く本年も講本は信卷昨年の三信釋の續き、「然就菩提心」より以下「唯佛一道獨淸閑」迄と定め、大體左の日程で會期を終了したのであります。

一、毎朝七時佛前勤行（正信偈和讃六首、改悔文、歎異抄輪讀、御一代聞書）八時開講、毎日二席。

一、毎夕七時、信仰談話會、會後佛前勤行（文類正信偈和讃三首、御文）

而して其の間第三日と第六日には特に午前に於て茶話會を開き來聽諸氏の談話を乞ひ、第五日には特に講話席上に壇を設けて折柄御登遐あつた　有栖川宮殿下奉悼の勤行を、一同てつとめさせて頂いた。

さて本年に於て特筆す可き事は、前年と人數に於ては大差無かりしも、本年は不思議にも生沼曹六氏中桐確太郎氏を始めとして、敎養ある人士が連日非常に多く來聽下された。而して本年は特に信仰の、權假に停り易き點を詳說した爲め、何れも〳〵深く〳〵傾聽して下され、年來の信者も更に驚きを立てゝ聞かるゝといふ有樣であつた。而して其の結果今年は、新たに入信の人よりも、多年聞法の人が、一層喜びを高めらるゝ出來事が多かつたのである。殊に有難かりしは、毎回必ず上京下さる若松求道會の和泉鐵次郎、及び本年上京の佐治由吉二氏が會期半ばに於て、駭然多年の喜びの誤なりしに氣づき、爾來聞法、遂に慈光の直射に遇ひ給ひたる事であつた。和泉氏が最終日淺草に於ての告白の如き、其の感激の上より今次の喜びを述べられ、一同皆な暗涙に咽せばさせられた。其の他主なる學舍の同朋、長尾氏を始めとして、本年は何れも〳〵皆な一段の喜びを加へられた。

又著しきは、開會以前より上京道を求めて居られた大分の山村改助氏は、會期半ばに非常なる煩悶に陷入り、殆んど聽講に堪えざる迄であつたが、不思議にも一言の法緣で忽ち安心せられた。又上野仁左衞門氏の如きは身久しく軍隊に在りて、更に法緣の無かりし人なるが、一席の講話で忽ち佛種開發して信仰生活中の人となられた。其の他本年も會期中佛智不可思議の事實を數々見せて頂いた事であつたのである。

又本年は大和より大原逵道老人は本會の開催を聞きて、高齡病弱の身を以て、態々上京して下された。老人は本號にも告白せられた如く、先年親鸞聖人御遠忌の御緣によりて入信せられた人である。其の學舍に着して初めて年來の素志を達し、滿足げの樣子には、思はず暗涙を催うさせられた。老人が茶話會席上、往事を追回して老齡、夫人に別れ信仰に苦心せられた實狀を告白せられた時は、滿場頭を上げ得る者一人も無き有樣で有つた。其他山崎震雷師は第六日目に夫人同道出京して熱烈なる告白に多大の感動を與へられ、又武田慧宏師は殆んど連夜夜會に出席して實驗を語り常に懇切に求道者を誘導して下された。

猶ほ本年も閉會式は淺草別院にて擧行し、特に本年も前例として　法主臺下格別の恩許を蒙り、親しく咫尺して阪東報恩寺藏親鸞聖人眞筆の敎行信證を拜觀するを得、彌々慈恩の渥きに、一同感激の外なかつたのである。猶ほ同所に於て紀念の撮影をなし、最後の講話を開き、夫れより一同打連れて阪東報恩寺に參拜、茲でも特別を以て、聖人御使用の笈を拜觀させて頂いた事であつた。猶ほ例の如く會期中署名せられし分丈けを擧ぐれば來會者次の如くであります。

第三回夏季求道會出席人名

近角常觀　中桐確太郎　笠木輔一　松本三郎　沖鹽政次
浪川明秀　東條喜一　大崎林吉　鈴木弘　栗須七郎　瀧澤
三郎　加藤竹三郎　森脇忠市　平松是信　近藤秀嶺　山村
改助　牧野良平　牧野せつ　調圓理　白井成允　原田俊之
助　野邊地慶三　神宮德壽　松崎周介　浮里宜也　橋本芳
雄　籾山靜太郎　今井愛之助　井上玄一　長尾收一　堀勇
吉　片野鐵次郎　杉野芳太郎　平光吾一　石原ひろ　棘野
あい　岡田みつ　加藤てる　清水かつ　小林信子　丸茂文
豐　岡雛子　松下要子　今井しげ　宇野はつ　岡田えつ　瓜
生さかえ　山名花野　小林しづ　阿部たみ　小出はや　山
岡まさ　増田やえ　高橋しげ　青山えい　阿野慈舟　丸茂
むね　長尾かず子　中原菊英　淺野孝之　大原達道　佐伯
曉　高松きみ子　田巻しげ　伊藤喜無　近角常音　近角雪
枝　近角きそ子　近角伊惠子　小澤一　碓井半二　井口哲
宗　佐治由吉　和泉鐵二郎　志保澤忠三郎　桑門典　石井
彦次　秦由太郎　東條勝友　豐岡東江　星川岩次郎　岡田
小三郎　岡田泰吉　葵見丸　片野ついい　瀨川よし子　市原
ふさ　谷彌三吉　田代幸作　村本のぶ　塚原秀峰　下川履
信　田村政太郎　長澤惠海　安富成中　常盤大定　別府哲
二郎　別府とく　清水せい　山内鷲　湊しづ　笠倉きよ
田中常眞　内堀末松　遠藏誠眞　石井岩次　谷口藤太郎
福島しげ　市原直木　前田つな　松本省六　渡邊源十郎
志田熊七　杉田たつ　清岡博見　春田滿二　春田きん　池
田福松　由良長藍　宮澤泰　中條たも　高羽ちよ　鈴木り
ん　村井ちよ　福間最勝　福間祐勝　三宅利衛門　岡田與
吉　岡田かめ　酒井諦歡　天川しづの　森脇ひて　樺島信
太郎　生沼曹六　小西金二　菅原廣濟　森口やすゑ　原な
か　隅山廣吉　町田とし子　酒井ふさ　大澤宇太郎　高島
藤作　田中淨信　前本義和　金丸勝五郎　湯澤幸吉郎　柳
瀨留治　棘野仲三郎　佐藤浩　望月政次郎　泉道雄　開定
次郎　中堀ます　藤原さとゑ　友成はる　西村啓造　莘原
雅亮　佐々木貫練　岡田伊佐雄　松崎壽三　松島なみ　上
田くに　小河滋次郎　成瀨　板倉はま　碓氷みよ　井上か
つ　三澤やひ　幸保たま　中野みつ　渡邊さき　松澤和
蛯川てう　今川　原山三郎　上野仁左衛門　岩本由藏　奈
倉和嘉　海野英俊　山内はつゑ　原ふゆ子　原みよ子　竹
内公明　湊八重子　竹鼻尙友　原卓一　東愛子　武内善孝
谷口次三郎　原基　黄葉秋造　森脇みね　尼川靜乃　田町
正譽　谷内正順　中里庄五郎　須田　加藤　沼波政憲　小
林りさ　田中みな　長谷川　大塚ひさ　和田まさ　長田し
き子　石崎太郎　鈴木久作　谷口藤太郎　塚原いく　大住
まき　安藤ゆう　水谷くに　乾九平　木場了本　飯田みよ
太田きぬ　江崎うた子　大井百子　山本金太郎　山本と
み　西本龍山　井口乘海　成瀨勝右衛門　小熊まき　山崎
震雷　上田定次郎　竹川吉太郎　岩本山藏　吉田庄七　三
輪高　山岡のぶ　森由太郎　山崎ます子　大原幸一郎　縫
塚巳之助　角谷八三郎　小木千枝子　松下さと　石垣りゆ
う　河野せき　柏原あき子　根岸武子　水上わき　服部貞
子　東虎二郎　東あい子　小宮はま　橋とみ　石井かつ
堺ふさ　綾部りく子　藤井善明　松本たゞ　安藤寅吉
粟田より子　伊藤れん　遠藤誠信　幸保たい　渡邊源作
近角文常　近角眞觀　近角勝子　西村ゆん　日比野平助
百目木智璉　高橋萬平　玉木しげ　中井みち　水谷つう
原さわ子　土井　岡田政由　桂說堂　近藤準

眞宗全書

既刊目次

第一回分（二月十日發行）○註疏部　大經甄解十八卷（道隱）○史傳部　二十四輩次第記一卷（親鸞上人傳直弟散在記一卷（宗誓）二十四輩散在記一卷（宗誓）拾聚抄二卷（天旭）遺德法輪集七卷（宗誓）明義對辨一卷（天旭）二十四輩記十二卷（是心等）大谷遺跡錄四卷（先啓）諸寺異說彈妄一卷（先啓）二十四輩名位（常樂寺傳）二十四輩名位（乘恩傳）一卷

第二回分（三月十日發行）○註疏部　安樂集勸信義一卷（慧然）安樂集日纂三卷（慧琳）安樂集正錯錄一卷（汝信考定法霖辨覈）道粹錄

第三回分（四月十日發行）○註疏部　往生論註服宗記六卷（慧雲）往生論註原要六卷（大瀛）往生論註筆記（寶雲）○雜部

第四回分（五月十日發行）○註疏部　選擇集要津錄十一卷（道隱）選擇集通津錄四卷（慧雲）○史傳部　紫雲殿由緣記十六卷（明專）

第五回分（六月十日發行）○註疏部　往生論註聞書六卷（宣明）略論安樂淨土義講義二卷（大含）讃阿彌陀佛偈筌一卷（僧鎔）眞宗假名聖教關典錄十三卷（琢成）三徑往生文類記一卷（靈雄）尊號眞像銘文鐫一卷（慧琳）

第六回分（七月十日發行）○註疏部　觀經四帖疏講義十三卷（義敎）觀經玄義分丁酉錄四卷（慧雲）○史傳部　宗祖世錄五卷（慧旭）親鸞上人正明傳四卷（存覺）親鸞上人正統傳六卷（良空）非正統傳一卷（玄智）繪像木像由緒一卷（空慧）高祖御眞影記一卷（先啓）

第七回分（八月十日發行）○註疏部　敎行信證文類樹心錄十卷（智遥）淨土文類聚鈔闡曜記四卷（圓澄）淨土文類聚鈔慶哉錄四卷（泰嚴）愚禿鈔錄二卷（寶雲）眞宗法要撮要記一冊（明增）三經往生文類善光錄一卷（興隆）尊號眞像銘文棲心錄一冊（興隆）一念多念證文錄一卷（興隆）唯信鈔文意義概錄一卷（履善）末燈鈔管窺錄六卷（僧鎔）親鸞聖人御消息集錄一卷（興隆）

第八回分（九月十日發行）○註疏部　選擇集叢林記八卷（惠空）眞宗關節五卷（月笙）淨土眞宗要義論題四卷（慧海）

大方の歡迎を受けて豫定計畫四分一の刊行を終りたる眞宗全書は其第一回第二回の再版も久しく缺本となりて希望者の切なる要求に應ずる能はざりしが、今回愈々成せり。本院は是を期として五十部限り新に豫約に應ぜんとす。願くはこの好機を逸せず眞宗の新大藏を所藏して大悲の本院は豫約購讀者の爲め特に普化の利益を計り玉はんことを計り左の甲種乙種丙種丁種の四種類の便法を設く。

第二版

甲種　既刊の二回分代價及郵税金　毎月一回代價及郵税八回分便又は前金普通小包便にて購入すると。

乙種　既刊の八回分代價及郵税　毎月一回代價及郵税八ヶ月購入すること　前金の場合貳拾壹圓拾貳錢　引換郵便貳圓拾四錢　前金の場合貳圓六拾六錢　引換便貳圓八拾四錢

丙種　既刊未刊を問ず新たに第一回分より毎月購入すると。代價及郵税　前金の場合貳圓六拾六錢　引換便貳圓八拾四錢

丁種　眞宗全書全部二ヶ年分前金にて購入の場合には郵税共金五拾八圓とす

洋裝菊判裝訂麻布
意匠優美
五號活字一冊五百頁
毎月二冊宛刊行

發兌所　京都市上ル　麓路二十番　汐小町　株式會社　藏經書院　振替口座（東京）二六三三番　電話下六七二番

近角常觀著

補增 訂正 信仰之餘瀝

第拾貳版　定價卅錢　郵税四錢

袖珍美本

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の暗黑界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歲の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、いたすら内心の實感の披瀝に努めたる事は既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其十二版を出すに及び本書を線として入信せられたる諸君の多數なるは、吾人の私に感謝措く能はざる所なり。而して先に第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に增補すること六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附錄として『子が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が爾後の信仰の根底は本書に於て明かならん。

懺悔錄 附錄『歎異鈔』

第八版　定價二十錢　郵税四錢

袖珍美本

本書は著者が實驗の信味に基づき從來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞諦、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歲以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と服後に佛陀攝取の慈光に接して人生の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中安慰を得給へる某氏の質例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯救濟の一道ある所以を可嘗懇切に詳述したり。蓋し是れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人少なかもず

（懺悔錄穴しく品切れの處今回第八版出來せり）

人生と信仰

第四版　定價卅錢　郵税四錢

袖珍美本

◉第一章　人生問題と信仰
◉第二章　悲觀思想と信仰
◉第三章　倫理力行と信仰
◉第四章　犯罪心理と信仰
◉第五章　社會問題と信仰
◉第六章　國家秩序と信仰
◉第七章　世界宇宙と信仰

本書内容は目次に示すが如し。先年『求道』秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は法律的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰によりて根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を望む。

發賣所　振替東京市本郷區森川町一番地口座東京一六六九六番　求道發行所

近角常觀編著書目

親鸞聖人の信仰　式版　定價七十錢　郵税八錢　クロース綴

唯信鈔文意　冠頭　初版　定價七錢　郵税二冊迄二錢　施本用小冊子

歎異鈔　冠頭　六版　定價五錢　郵税三冊迄二錢　施本用小冊子

信仰之餘瀝要略　三版　定價五錢　郵税四冊迄二錢　施本用小冊子

施本用小冊子は部數に應じ充分割引す

當所は何書にても御都合により郵便集金法にて御注文に應じ可申候

申込所　東京市本郷區森川町一番地　振替東京一六六九六番　求道發行所

規定

一 本誌は毎月一回三十日發行とす
一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局に必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一 郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一 本誌の講讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるゝ、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添へらるゝ事
一 本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

◉廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

大正二年八月廿七日印刷
大正二年八月三十日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
（振替口座東京一六六九六番）

大賣捌所　東京市神田區　同　東京　北京橋區　隆京堂館

求道第拾卷第六號　大正貳年八月三十日發行（毎月一回三十日發行）　明治四十五年二月十五日第三種郵便物認可

前號要目

求道

◉能令瓦礫變成金　近角常觀

講義

◉『教行信證』信卷三信釋

第八席

信樂釋（厭離穢土欣求淨土）

告白

◉入信の深　吉田藤吉

講話

◉智愚の毒を滅す　近角常觀

一　機緣純熟
二　わかるわからぬで助かるのでない
三　信仰上二種の傾向
四　不思議の眞意の頂けて無い人
五　不思議の味ひ
六　意外なる西岸上の喚び聲
七　やるせなき大悲のみ心
八　道德と信仰と矛盾せる間に
九　我等の隔て根性
一〇　「げにほこられ候へ」

雜錄

◎九州傳道所感　近角常觀

東京市神田區表猿樂町二ノ一三　求道會